

米 子 市
教育文化事業団 3
文化財調査報告書

米子城跡 I

——米子市西町 36-1 地点——

1993・3

米子市教育文化事業団



内堀（汐止め松を望む）



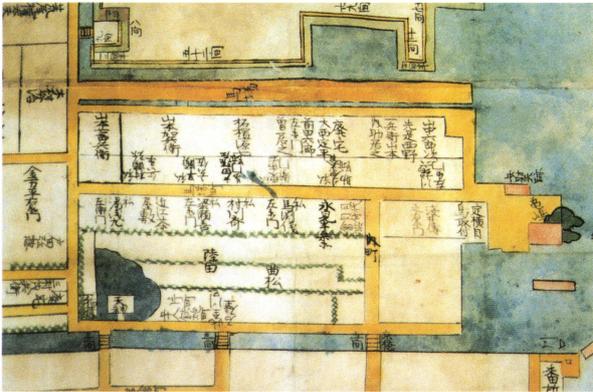
1区全景



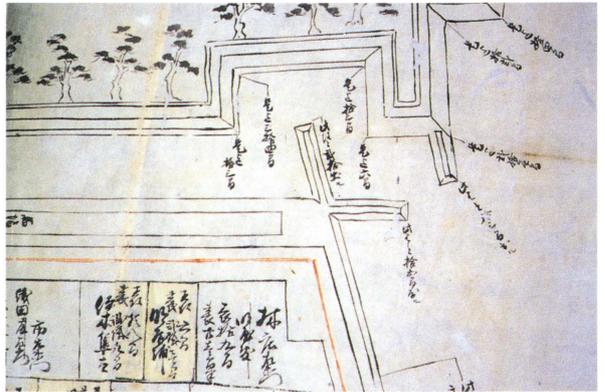
3区土層断面



2区全景



伯耆国米子平図（宝永6年）



米子御城下図



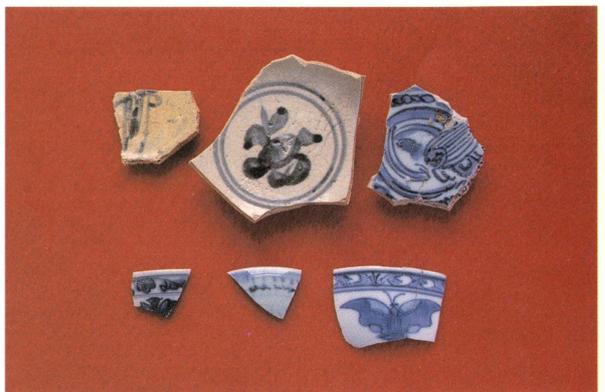
瀬戸美濃・近江系・楽焼系



青磁・白磁



唐 津



染 付

例 言

1. 本書は、平成4年度において財団法人米子市教育文化事業団が実施した米子城跡鳥取大学医学部附属病院構内にかかる報告書である。
2. 調査の組織は下記の通りである。
調 査 委 託 鳥取大学
調 査 主 体 (財)米子市教育文化事業団 (理事長 森 田 隆 朝)
調 査 担 当 (財)米子市教育文化事業団 調査員 藤 原 裕 子
調査協力・指導 村上勇 (広島県立美術館主任学芸員)、久保穰二郎 (鳥取県立博物館学芸員)、坂本敬司 (同)、高橋正弘 (城郭研究家)、ト部吉博 (鳥根県文化課)、西尾克己 (同)、長田康平 (溝口町教育委員会)、佐藤公彦 (鳥取工業試験場)、川越一幸 (戸田建設)、松本哲、田中敦、杉谷愛象 (米子市教育委員会教育文化課主任)、灘脇俊彦 (就将小学校教諭)、中曾千里 (米子市教育文化事業団調査員)〈敬称略・順不同〉
3. 出土遺物はすべて米子市教育委員会で保管している。
4. 本書の編集及び執筆は米子市教育文化事業団で行った。

目 次

I. はじめに	3
調査の概要.....	3
位置と環境.....	3
II. 遺 構	4
1. 掘 割 り.....	4
2. 建 物 跡.....	4
3. 内 堀.....	17
4. 土 壙.....	17
5. 排 水 路.....	23
III. 遺 物	23
IV. まとめ	32

米子城関係年表

年号	西暦	事項
応仁 元年	1467	この頃山名教之の配下山名宗幸が米子飯山砦を築いた。
大永 4年	1524	出雲尼子経久伯耆に攻め入り、米子城が従えられ、尾高城主城を去る。
永録 5年	1562	この頃より米子城は毛利氏によって制圧される。
元亀 2年	1571	尼子氏の羽倉孫兵衛が米子城を攻め、城下焼討ちに合う。
天正 19年	1591	出雲伯耆の領主吉川広家が、米子湊山に築城開始。城主古曳吉種。
慶長 3年	1598	米子港・深浦港整備始める。
5年	1600	関ヶ原戦。吉川広家周防国岩国に転封。中村一忠が伯耆領主に転入。
14年	1609	中村家断絶。
15年	1610	加藤貞泰伯耆国会見・汗入郡六万石領主となる。
元和 元年	1615	幕府一国一城令発す。米子城保存。
3年	1617	池田光政因伯の領主となり、池田由之が米子城主（三万二千石）となる。
4年	1618	池田由之死亡、子息由成米子城主となる。
寛永 9年	1632	池田光仲が因伯の領主となり、家老荒尾成利米子城預りとなる。
承応 元年	1652	二代目荒尾成直米子城預りとなる。
寛文 7年	1667	米子城西北部外曲輪修理。
10年	1697	大風で米子城本丸四重櫓一尺五寸程傾く。
享保 5年	1720	米子城米蔵約半数大修理、壁・屋根部分に川石を主体として約二万個使用。
享保 8年	1723	城下郭内屋敷田31町歩の内、水利不足により畑に改められたもの1/3。
宝暦		この頃船越太郎左衛門、東町より西町の間沼地を水田に開拓する。
寛政 8年	1796	城下外郭筋堀の埋没を浚渫。
5年	1852	四重櫓とその石垣大修理される。
慶応 3年	1867	11代目荒尾成富米子城預りとなる。
明治 2年	1869	荒尾氏自分手政治廃止の発令。朝廷より米子城返上の命あり。
5年	1872	米子城山は士族小倉直人らに払下げとなる。
6年	1873	城内の建物類売却され、数年後取りこぼされる。
19年	1886	汐止め流れる。
22年	1889	町制発布。
35年	1902	城山本丸を整備して弘楽園とする。

I はじめに

1. 調査の概要

鳥取大学医学部構内遺跡は米子市西町36番地-1に所在する。鳥取大学医学部附属病院の再開発整備事業に伴う事前調査である。

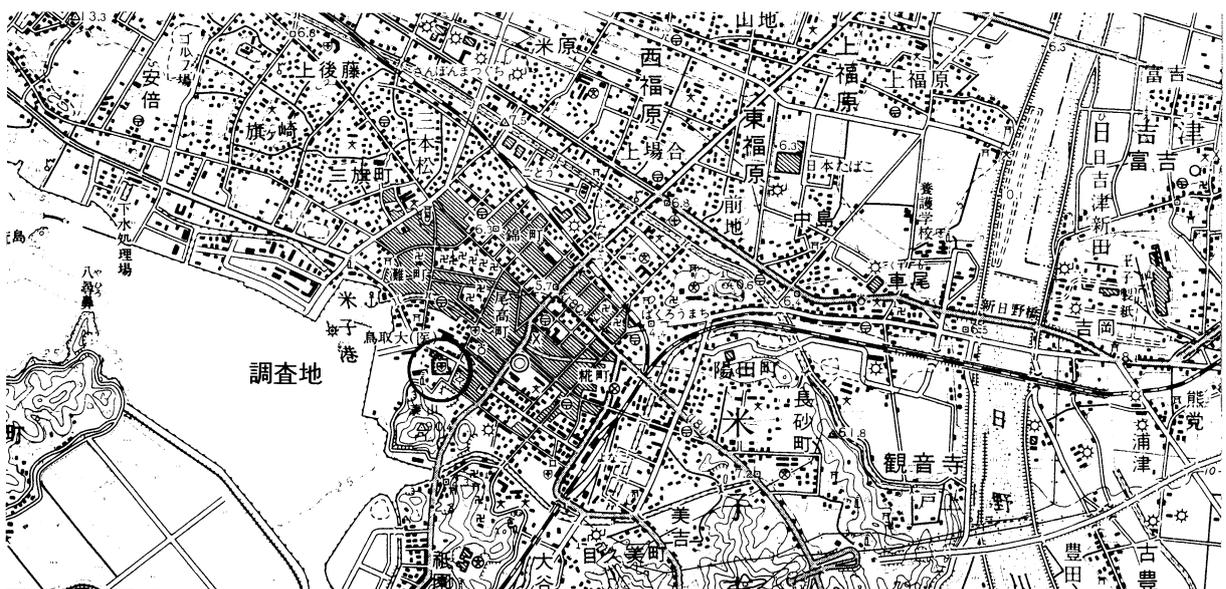
米子市教育委員会によって1992年5月7日から1992年5月14日まで現地試掘調査を行った。調査の結果、中世から現代までの遺物を検出した。また当地は、近世米子城の内堀と外堀の間で城郭の外郭に当り、絵図面等によっても堀や武家屋敷等が明確に記されているところである上、1988年の隣接する久米遺跡の調査に於いて、近世以前の遺構も検出されていることから調査が必要となった。

米子市教育委員会と鳥取大学の協議の結果、本調査の実施を決定し、鳥取大学より発掘調査の委託を受け、財団法人米子市教育文化事業団が第1次調査を1992年10月19日から11月14日まで、第2次調査を1992年12月10日から1993年2月20日まで行った。調査対象面積は6000m²であったが、病院関係の施設があった為、2500m²の調査を行った。調査の結果、古墳時代から近現代までの遺物を検出し、内堀跡・掘割り（階段状遺構を含む）2カ所・建物跡（屋敷境界石組1・石垣1、掘立柱建物）・土塋・その他の遺構として、暗渠排水1・排水施設2、貝溜土塋2、井戸2、溝等の遺構を確認した。

2. 位置と環境

今回の調査地は、絵図によると内堀石垣・馬場・武家屋敷等になっている部分である。絵図の記載も宝永6年・享保5年の絵図では、堀の外側には汐止がなく、馬場と屋敷の境界には水路が書かれているが、幕末の絵図によると汐止は描かれ、馬場の水路は消えているというように時代によって異なり、また武家屋敷においては、山中六郎氏・大西定平氏・前田六郎左エ門氏・柘榴源七氏・山本加兵衛氏等の名が、林庄左エ門氏・織田一左エ門氏・山本嘉平氏等に変わっていることから、武家の変遷も見られる。

米子城の始まりは、1467年（応仁元年）頃山名教之の一門山名宗幸が飯山に砦を築いたと



第1図 調査位置図 (1/50,000)

言われる。伯耆、出雲の国境にあり中海に臨んだこの城の位置は、軍事、政略上の重要地であり、早くから攻守争奪の対象となっていた。

1591年（天正19年）に東出雲・隠岐・西伯耆12万石を領有した吉川広家によって築城が始められ、当時の城主は古曳吉種であった。関ヶ原以後1600年（慶長5年）に伯耆18万石の領主となった中村一忠が、今日に伝わる城閣を完成させたとされる。

その後中村氏は在城8年で断絶となり、1610年加藤貞泰、1617年池田由之を経て、1632年（寛永9年）より池田家家老荒尾氏預かり一万五千石となり、以後1869年（明治2年）まで続いた。1667年には城西北部外曲輪、1852年には四重櫓とその石垣の修理が行われる。城は1872年士族に払い下げとなり、1880年頃には壊された。

昭和になって病院関係の建物以外にも、様々な建物が建てられていることから、かなりの攪乱が予想されていたが、調査の結果、内堀ラインや屋敷の境界を確認出来た上、絵図面等には記載のない新たな施設等を確認することが出来た。

II 遺 構

1. 掘割り〔第2区西〕（第10・11図）

この部分は現代建物の基礎によってかなり攪乱されているだろうと思われていたが、米子城関係絵図によると武家屋敷になっていることから、屋敷の境界等の確認の為にトレンチを入れたところ石垣の一部を確認した。調査の結果、12m×9.5mを石垣で囲み、南西角に石段を設けた屋敷の中の施設と思われた。ところが東西の石垣はさらに北に延び水路状になっていた。

水路石垣は、高さは東西共に1.8mである。石垣下位で海拔-1.00mを測る。石垣の下はいずれも径27cmの縦半分に割った松材を胴木にして基礎としている。下段に大きめの石を並べ、その上にそれよりやや小振りの石を3～4段積み上げている。積み方は打込みはぎに近い。裏込めは石を隙間を埋めるように入れ込んである。石段部分は2段になっており、高さ下段50cm、上段40cm、総高約90cm、幅3.5mである。石段の上面で海拔-20cmを測る。

この石垣がどこまで延びるのか、調査地外に掛かってしまったため明らかではない上、絵図等に一切記述がない為不明であるが、船着き場として利用されていたのではないかと考えられる。水路を塞いでいた石垣は、かなり新しい時期に造られたものと考えられ、高さ1.8m、幅12mで石の下には松材を井桁状に組んで基礎としていた。

この遺構は昭和になってから埋め立てられたと考えられ、現代の遺物を数点検出した。

2. 建物跡

掘立柱建物〔ピット群〕（第5・6・7図）

1区及び2区において多数のピットを検出したが、1・2区共に範囲が限られ、具体的に建物になるものはなかったが、1区においては幾つかピットが並んだ。これらはいずれもほぼ北北東を向き、現在の米子の町並みの方向と一致する。

近世建物境界（第12図）

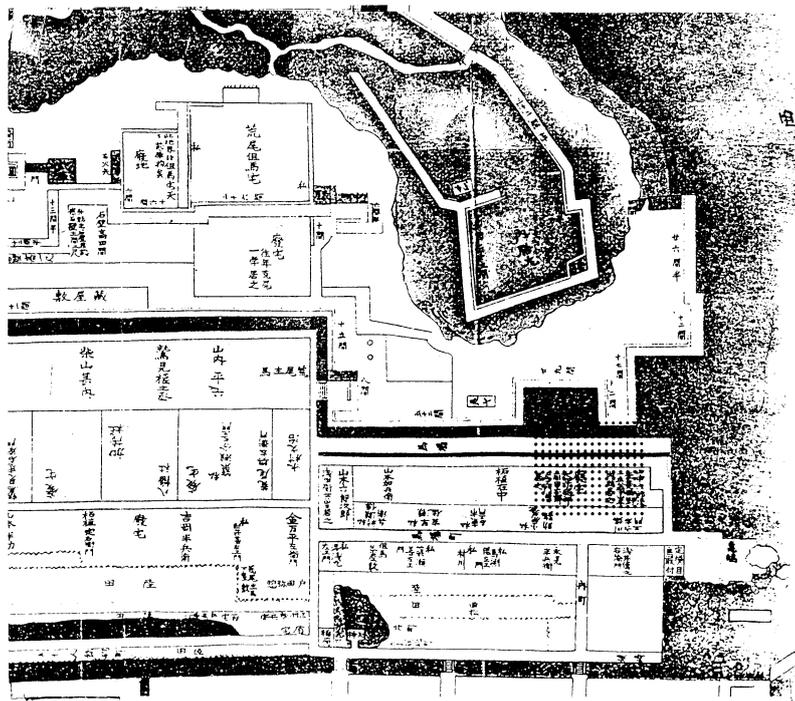
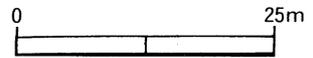
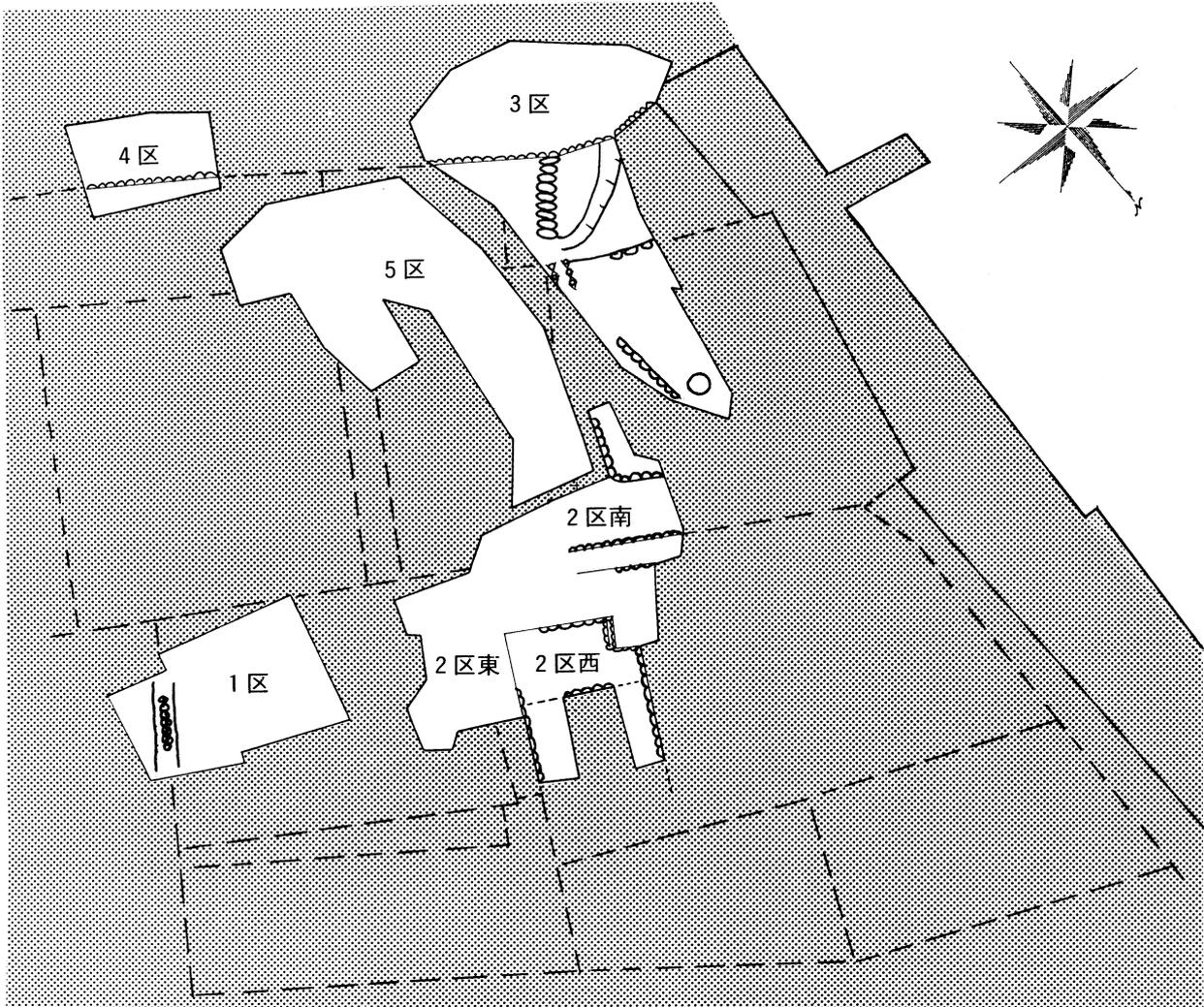
1区 検出全長約8mで、幅約0.6m、高さ約50cmの石組みである。柱材の転用と思われる



第2図 調査地周辺図 (1/5,000)

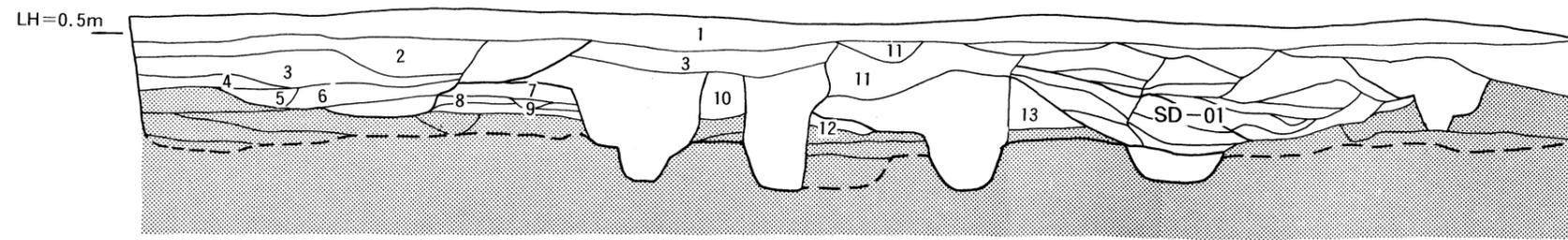
る木材を胴木として据え、その上に石を積上げています。この石積みはSD-01の中に積まれていた。この溝も屋敷境界となっていたと思われる。溝の肩には河原石が並んでいた。

2区西 検出全長約12m、高さ約0.8mの2段積みの石垣である。これは南側に面を成しているが、裏込めと思われる石が残っていることや、土層を見ると、この石垣の北側にも同じような石垣があり、この上に塀が建っていたと考えられるが、断定は出来ない。



▲地籍図・大正4年と調査位置図
◀米子城下絵図（享保五年）

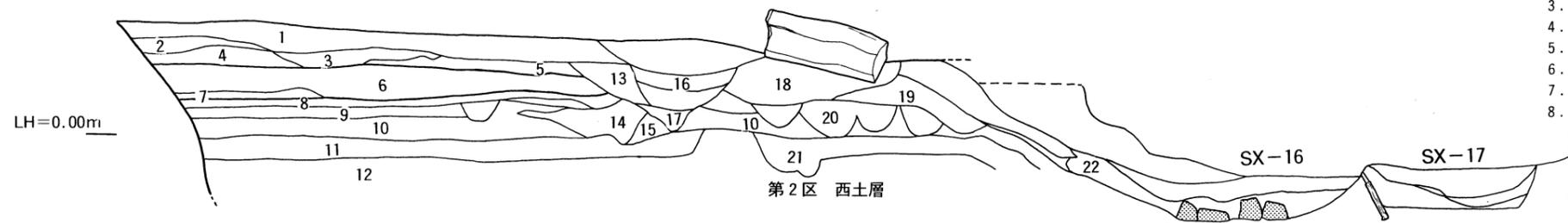
第3図 調査区位置図



第1区 土層

第1区土層

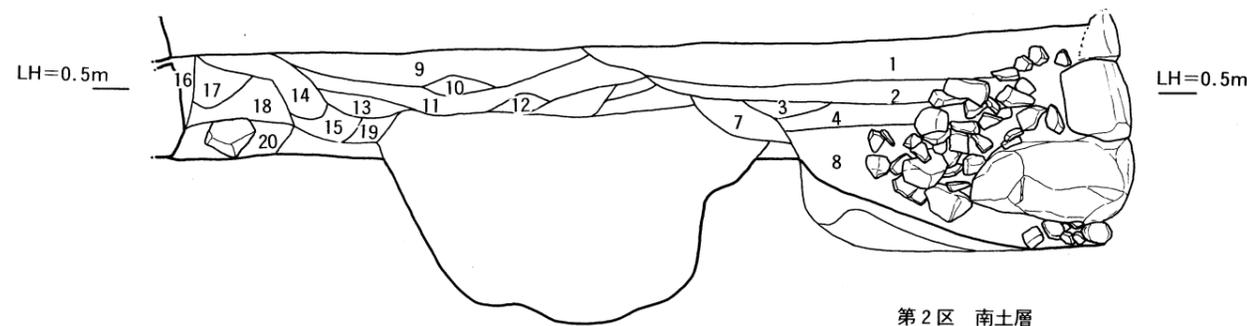
- | | |
|-----------------|------------------|
| 1. 表土 | 8. 暗灰褐色シルト (粗砂含) |
| 2. 褐色土 | 9. 褐色砂 |
| 3. 黄色土 | 10. 黄色土 (砂含、硬) |
| 4. 黄色~うす茶砂 | 11. 焼土 |
| 5. 黒色砂 (粗砂含) | 12. こげ茶砂 (硬) |
| 6. 黒灰色シルト (粗砂含) | 13. 暗褐色 (黄色粒砂含) |
| 7. 暗灰色砂 | |



第2区 西土層

第2区西土層

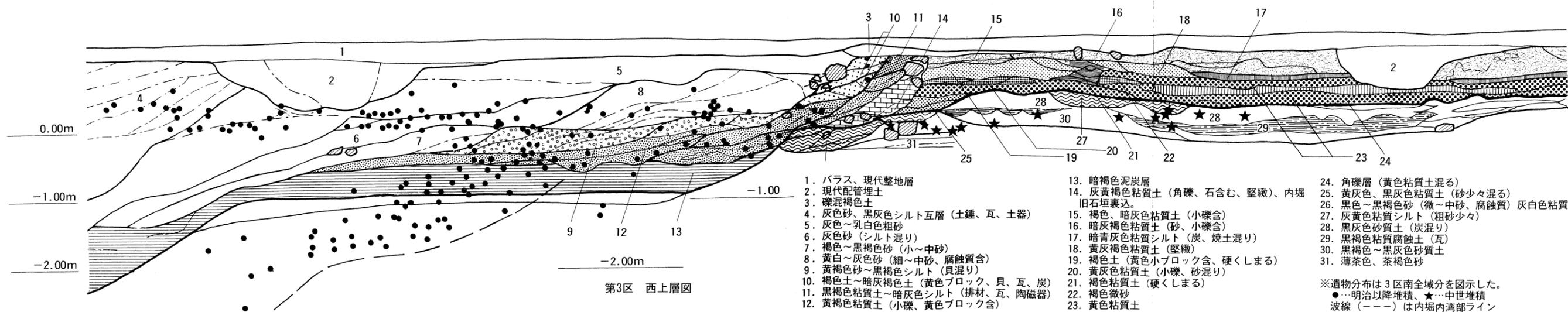
- | | | |
|---------------------|------------------|-------------------|
| 1. 暗褐色砂質シルト | 9. 白色小砂質土 (粗砂含) | 16. 暗灰色砂質シルト |
| 2. 暗灰色細砂質土 | 10. 白色~白黄色細砂質土 | 17. 黒褐色砂質土 |
| 3. 褐色砂質土 | 11. 灰色細砂質土 (小礫含) | 18. 黒色砂質シルト |
| 4. 淡灰褐色少砂質土 | 12. 小礫混合層 | 19. 黒褐色小砂質土 |
| 5. 灰褐色微砂質シルト | 13. 褐色シルト | 20. 黒色細砂質土・シルト混合層 |
| 6. 灰褐色小砂質土 (近世埋立土層) | 14. 黒色砂質土 (白色砂含) | 21. 微砂~細砂質土互層 |
| 7. 灰色細砂質土 | 15. 白色小砂質土 | 22. 黒色粘質シルト |
| 8. 黒色細砂質土 | | |



第2区 南土層

第2区南土層

- | | | |
|----------------------------|---------------------------|-------------------------|
| 1. 茶褐色粘質土 (礫含) | 8. 角礫層 (瓦・伊万里含) | 15. 黒灰褐色砂質土 (小礫含) |
| 2. 褐色土 (焼土・炭・小礫含) | 9. 混合層 (礫含) | 16. 黒色砂質土 (礫含) |
| 3. 淡褐色砂質土 (小礫・瓦含) | 10. 暗褐色土 (黄色ブロック含) | 17. 黒褐色砂質土 (黄褐色粘土ブロック含) |
| 4. 暗褐色土 (小礫・炭含) | 11. 暗茶褐色砂質土 (粗砂) | 18. 褐色砂質土・黒灰色砂質土混合層 |
| 5. 灰褐色砂質土 (炭少量・茶褐色土含) | 12. 薄茶粗砂土 | 19. 薄茶砂質土 (下位は砂質シルト) |
| 6. 灰褐色砂質土 (黄褐色ブロック含) | 13. 暗褐色砂質シルト (有機物含・しまりない) | 20. 黒灰色微砂質土 |
| 7. 黒色土・白色砂質土混合層 (炭含・しまりない) | 14. 茶褐色砂質土 (粘質混・ややしまる) | |



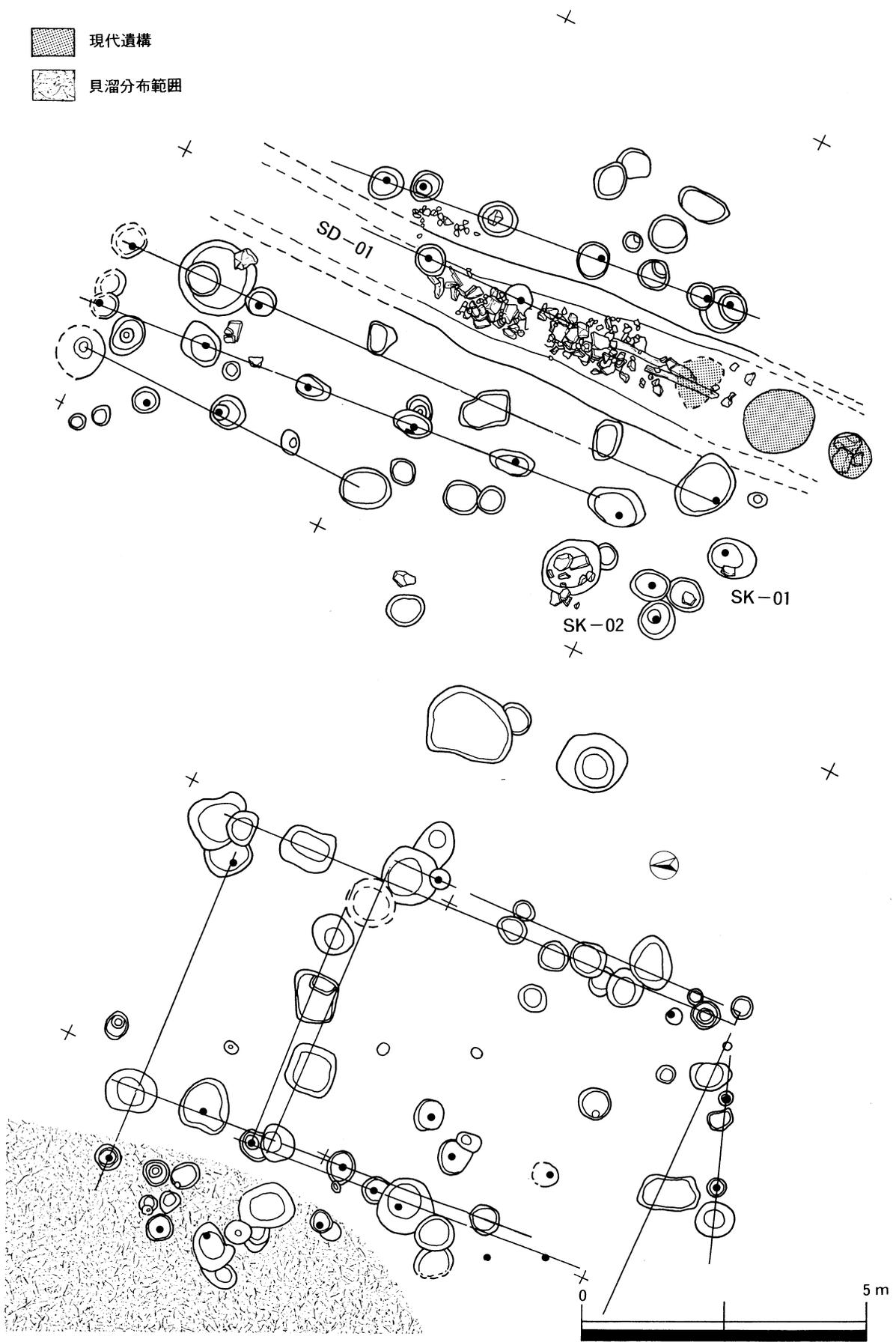
第3区 西上層図

- | | | |
|------------------------------|---------------------------------|-------------------------------|
| 1. バラス、現代整地層 | 13. 暗褐色泥炭層 | 24. 角礫層 (黄色粘質土混る) |
| 2. 現代配管埋土 | 14. 灰黄褐色粘質土 (角礫、石含む、堅緻)、内堀旧石垣裏込 | 25. 黄灰色、黒灰色粘質土 (砂少々混る) |
| 3. 礫混褐色土 | 15. 褐色、暗灰色粘質土 (小礫含) | 26. 黒色~黒褐色砂 (微~中砂、腐蝕質) 灰白色粘質土 |
| 4. 灰色砂、黒灰色シルト互層 (土錘、瓦、土器) | 16. 暗灰褐色粘質土 (砂、小礫含) | 27. 灰黄色粘質シルト (粗砂少々) |
| 5. 灰色~乳白色粗砂 | 17. 暗青灰色粘質シルト (炭、焼土混り) | 28. 黒灰色砂質土 (炭混り) |
| 6. 灰色砂 (シルト混り) | 18. 黄灰褐色粘質土 (堅緻) | 29. 黒褐色粘質腐蝕土 (瓦) |
| 7. 褐色~黒褐色砂 (小~中砂) | 19. 褐色土 (黄色小ブロック含、硬くしまる) | 30. 黒褐色~黒灰色砂質土 |
| 8. 黄白~灰色砂 (細~中砂、腐蝕質含) | 20. 黄灰色粘質土 (小礫、砂混り) | 31. 薄茶色、茶褐色砂 |
| 9. 黄褐色砂~黒褐色シルト (貝混り) | 21. 褐色粘質土 (硬くしまる) | |
| 10. 褐色土~暗灰褐色土 (黄色ブロック、貝、瓦、炭) | 22. 褐色微砂 | |
| 11. 黒褐色粘質土~暗灰色シルト (排材、瓦、陶磁器) | 23. 黄色粘質土 | |
| 12. 黄褐色粘質土 (小礫、黄色ブロック含) | | |

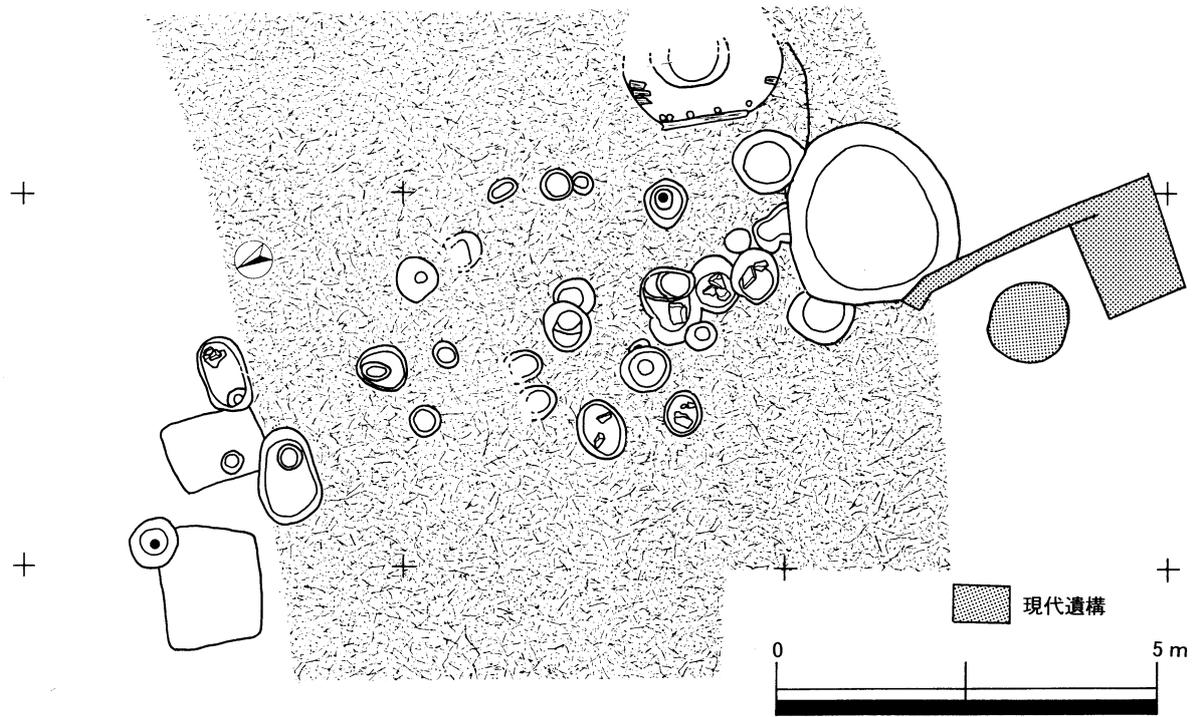
※遺物分布は3区南全域分を图示した。
●...明治以降堆積、★...中世堆積
波線(---)は内堀内湾部ライン



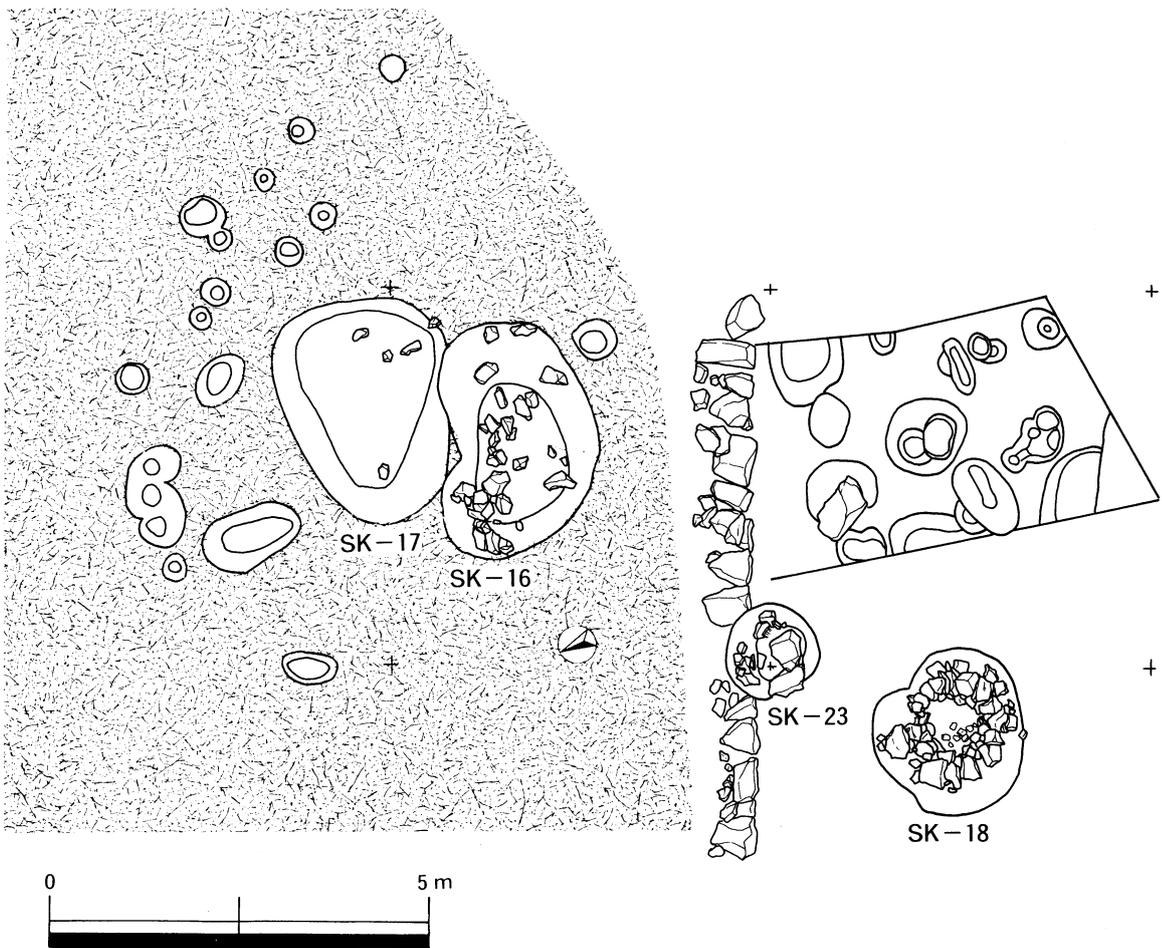
第4図 土層図



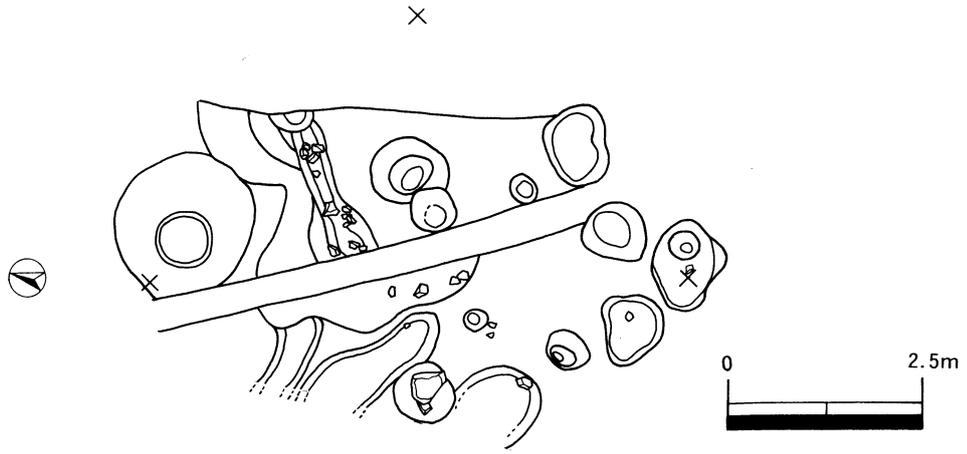
第5図 第1区遺構分布図



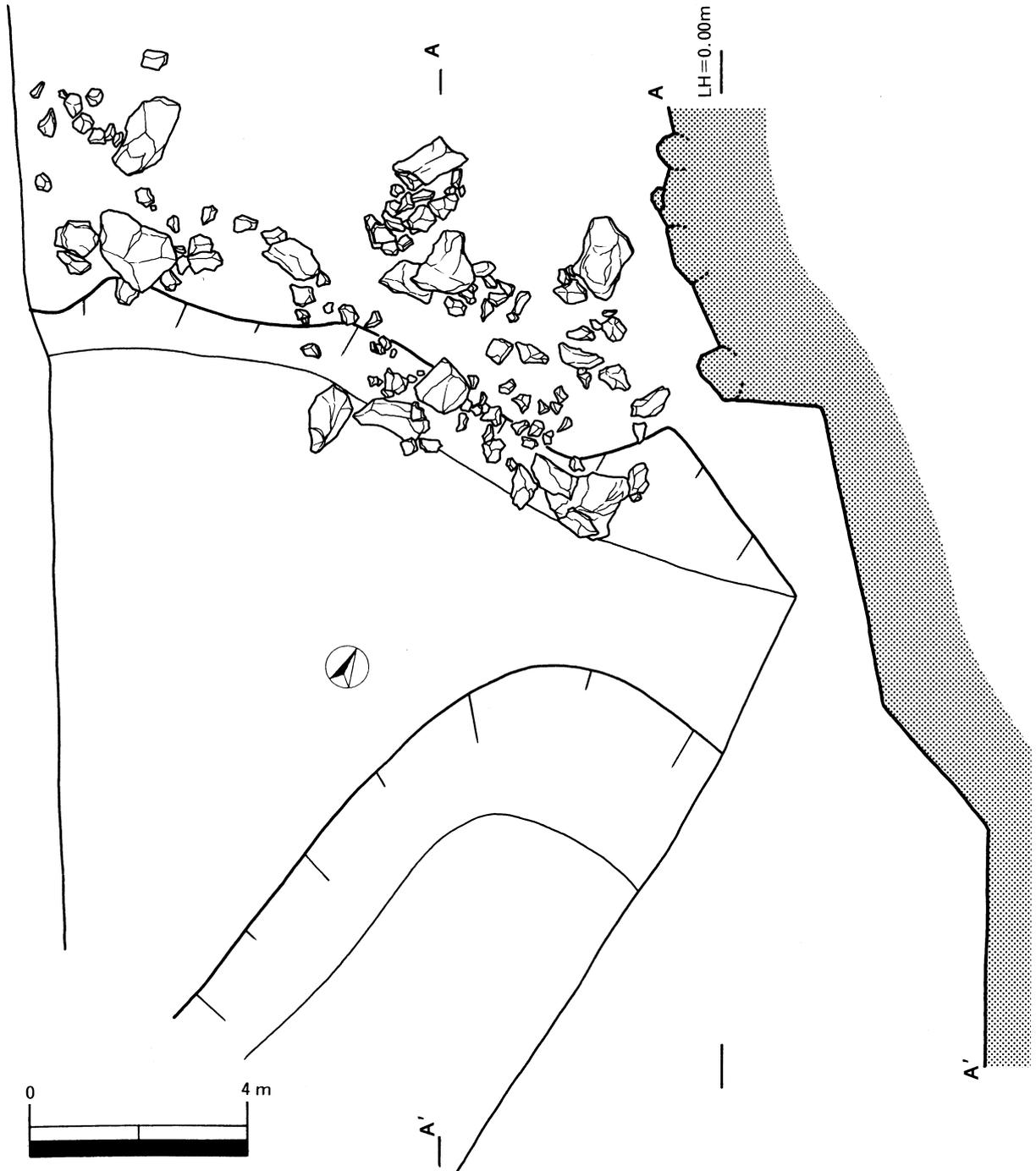
第6図 第2区東遺構分布図



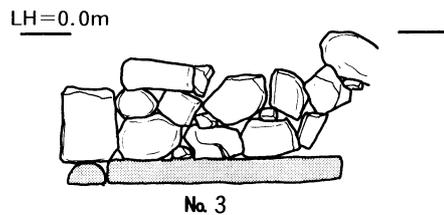
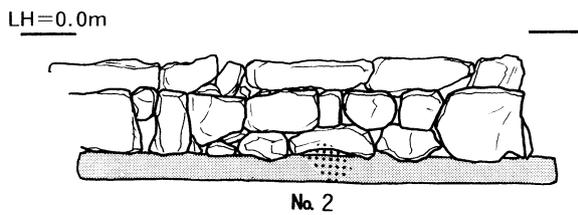
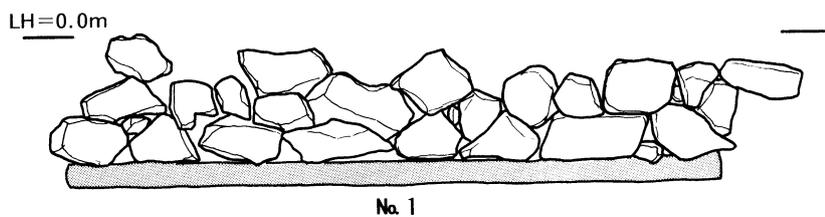
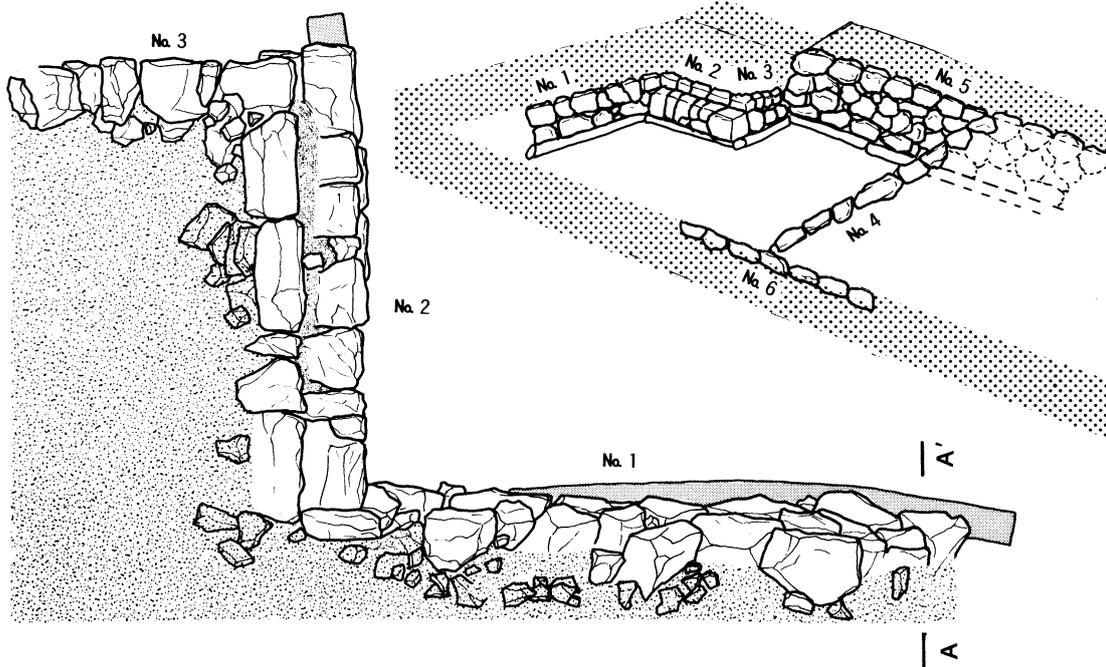
第7図 第2区西遺構分布図



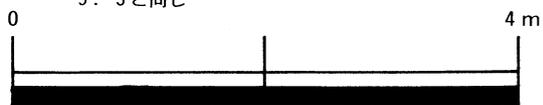
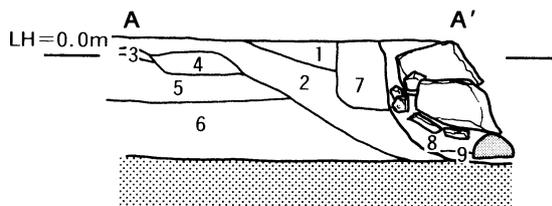
第8図 第3区遺構分布図



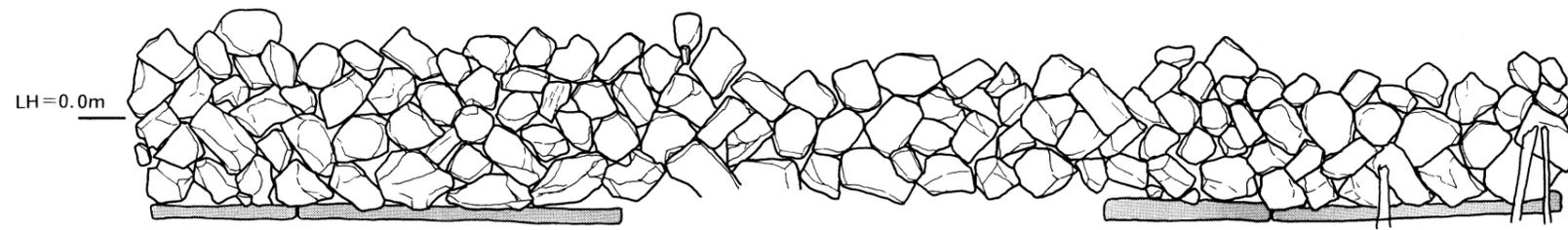
第9図 第3区内堀



- 2区石垣No.1
1. 灰白色砂質土 (腐食土含む)
 2. 黄白色砂質土 (粗砂層混)
 3. 黒色シルト
 4. 黒色微砂質土
 5. 黄白色砂質土 (中~粗い砂・鉄分若干含む)
 6. 白色細砂質土
 7. 黒色シルト・泥
 8. 黒灰色泥
 9. 3と同じ

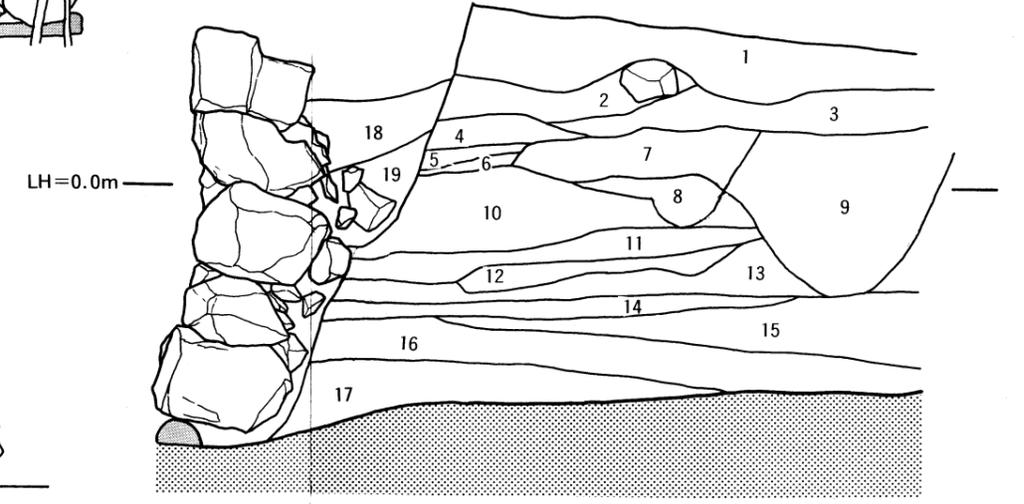


第10図 第2区西石垣

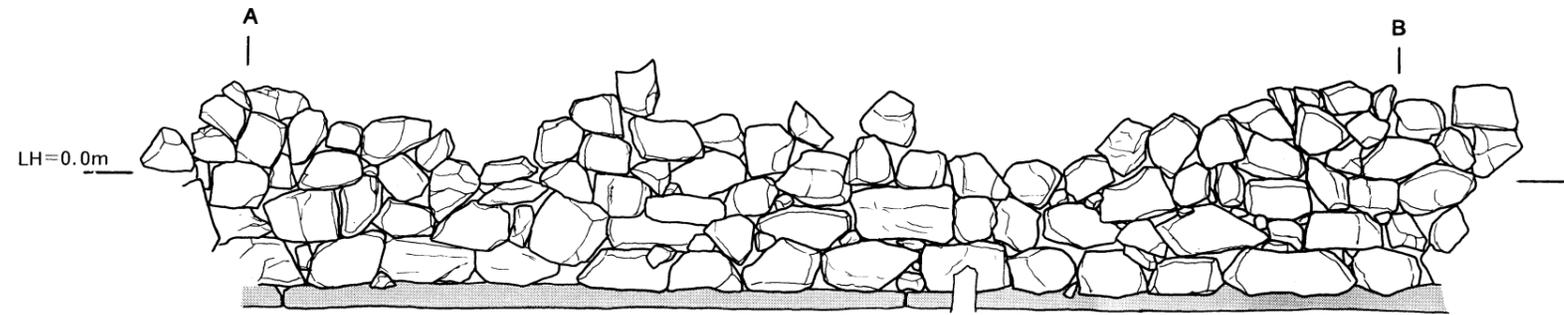
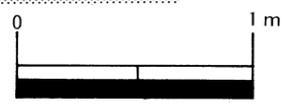


No. 4

- 2区東側
- 1. 黒青灰色粘質土 (炭・瓦含)
 - 2. 暗褐色粘質土
 - 3. 暗青灰色土 (黄色ブロック・粘土・砂粒混合・炭・瓦含)
 - 4. 黒褐色粘質土
 - 5. 黒灰色砂質土
 - 6. 反褐色砂質土
 - 7. 淡茶色砂質土・黒灰色土混合層
 - 8. 黒青灰色粘質土 (炭含)
 - 9. 暗灰色砂質土~黒灰色砂質土 (中・下部有機質含)
 - 10~15. 薄茶色砂質土・黒灰色土の互層 (細砂~中砂)
 - 16. 黒灰色粗砂 (有機質シルト含む)
 - 17. 薄茶色砂質土
 - 18. 黒褐色土 (礫含)
 - 19. 角礫層

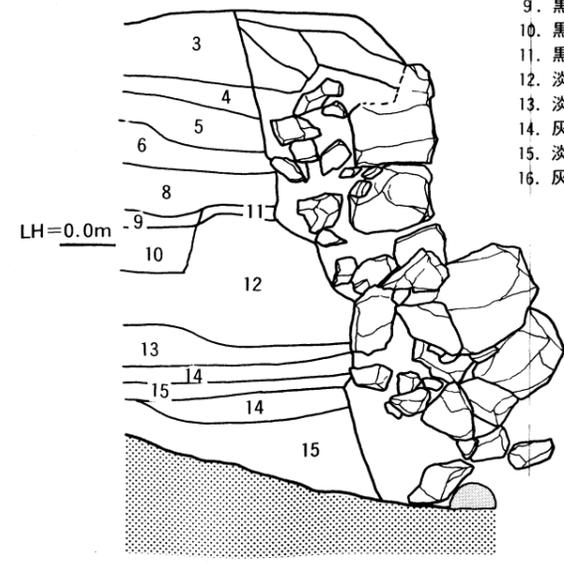


No. 6 掘割東断面

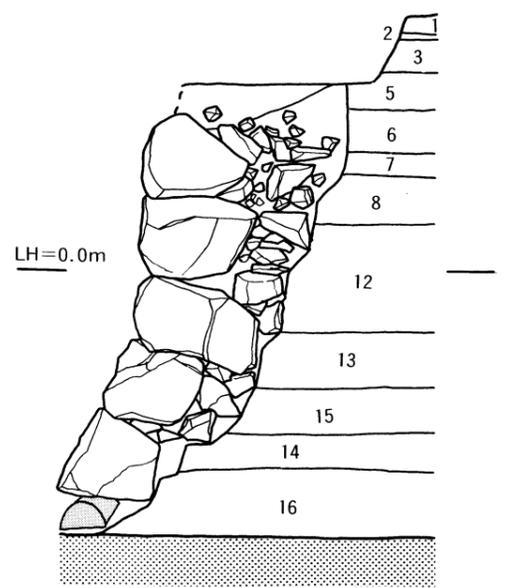


No. 5

- 2区掘割
- 1. 褐色土 (礫含)
 - 2. 黄色ブロック
 - 3. 淡暗褐色土
 - 4. 暗茶褐色砂質土 (黄褐色ブロック少量含)
 - 5. 暗茶褐色砂質土 (炭・黄褐色ブロック含)
 - 6. 黒褐色砂質土 (炭含)
 - 7. 黒色砂質土
 - 8. 黒褐色土
 - 9. 黒色粘質土
 - 10. 黒褐色砂質土
 - 11. 黒茶色砂質土
 - 12. 淡茶褐色砂質土
 - 13. 淡灰褐色砂質土
 - 14. 灰黒色シルト
 - 15. 淡茶灰白色砂質土
 - 16. 灰色シルト・砂互層

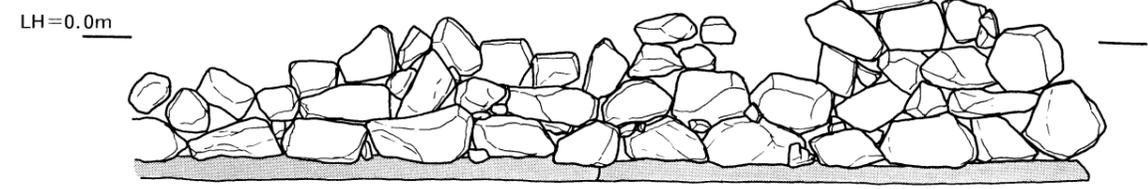


A

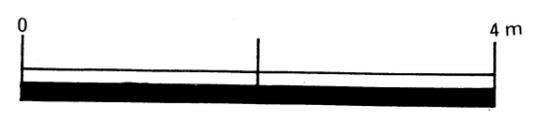


B

No. 5 掘割西断面

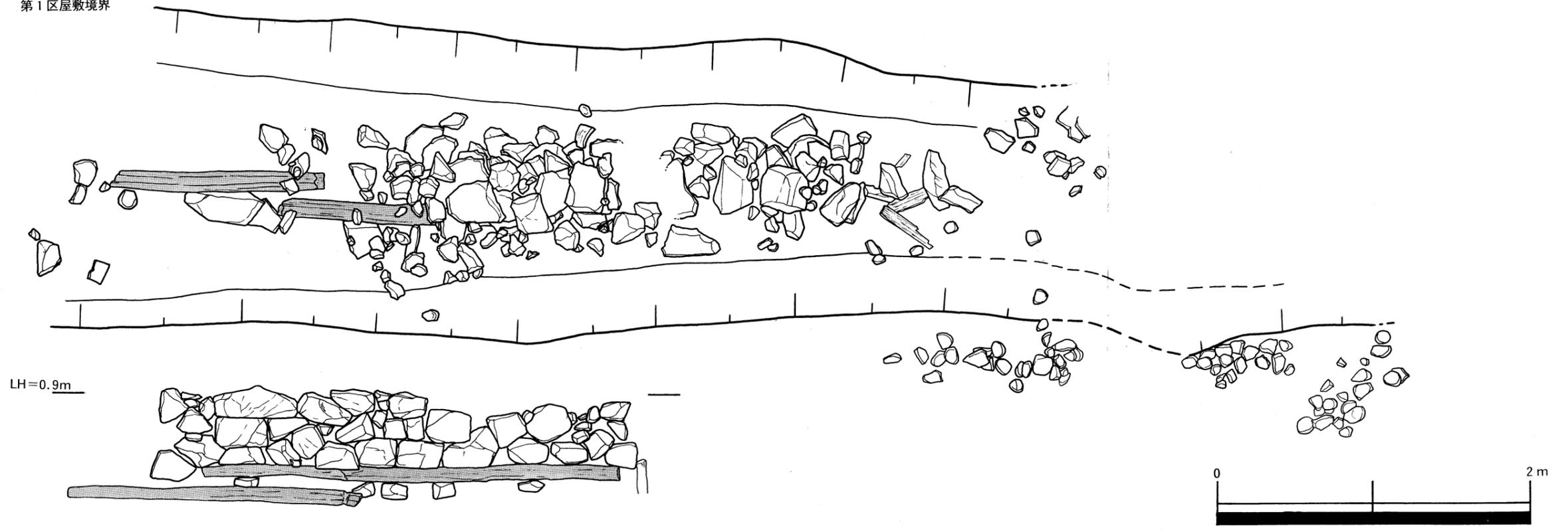


No. 6

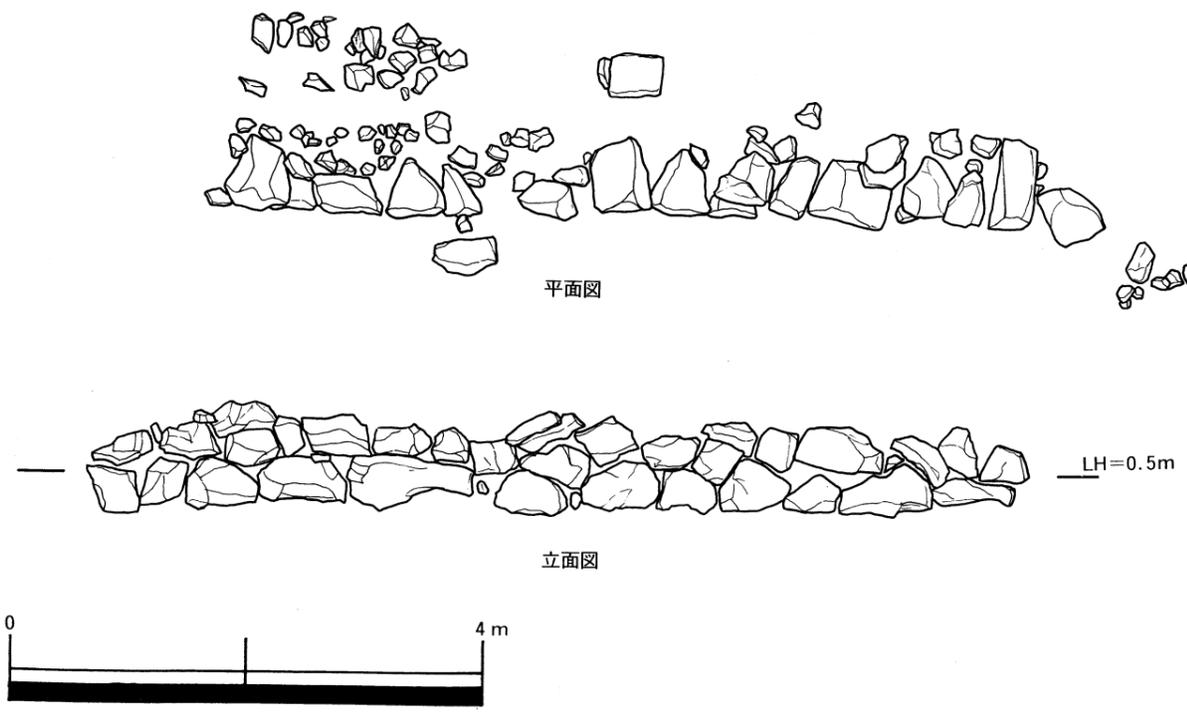


第11図 第2区石垣

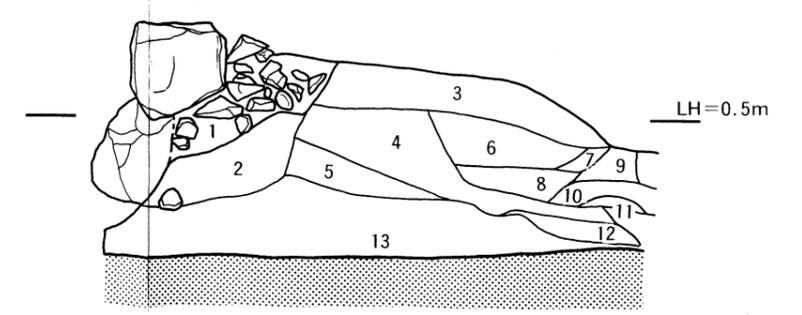
第1区屋敷境界



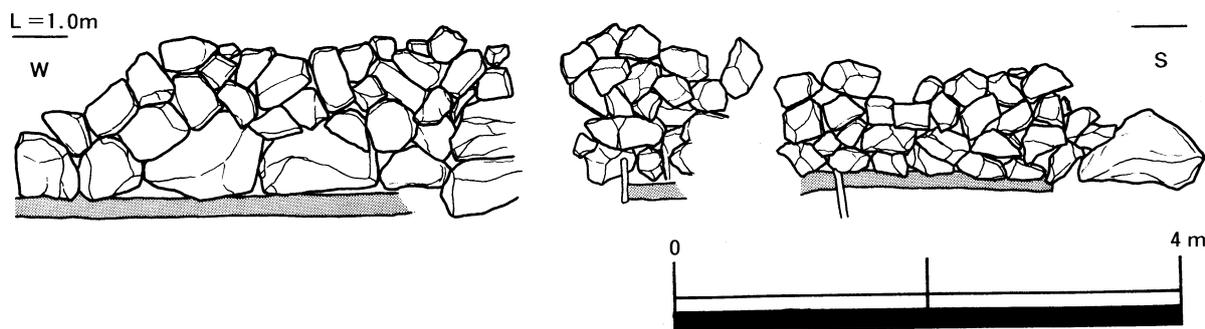
第2区屋敷境界



- 2区屋敷境界
1. 黒黄色砂質土 (若干粘性)
 2. 暗黒黄色砂質土
 3. 黄褐色砂質土 (黄色ブロック含む)
 4. 淡黒褐色砂質土 (若干粘性)
 5. 淡黒褐色砂質土
 6. 黄褐色砂質土 (淡黒色砂質土含む)
 7. 淡黒褐色砂質土
 8. 淡黒色砂質土
 9. 暗黒褐色砂質土
 10. 暗黒灰色粘質土
 11. 淡黒色砂質土
 12. 黄黒色砂質土
 13. 淡灰白色砂質土



第12図 屋敷境界



第13図 第2区南石垣

3. 内堀 (第14図)

地下埋設施設があったため、第3区と第4区と分けて調査を行った。第3区検出全長約22.5m、第4区全長12.5m、残存高1.5mを検出した。この石垣は1～3段を残し、石の下には径20cmの松材を胴木として敷き、さらにその前面に竹の杭を打つことにより基礎固めを行っている。石垣の2段目中央付近で海拔0mを測る。

石は多いところで4段残っているが、ほとんど上部を欠いている。石の積み方は打ち込みはぎに近いが、下段に比較的大きな石材を使って基礎としているが、その上は大小さまざまな石材を積み上げており、雑な積み方になっている。この石垣は絵図面等の記載と異なっていることや、遺物などからも近代になって堀を埋めた後に造り替えられたものであると考えられる。同時に汐止の位置を確認する為西側に拡張した結果、堀側に屈曲した幅3.5mの潮止の先端と思われる部分の石垣を確認した。これは明治の地籍図とほぼ一致し、石の積み方などからこれも近代になって造り替えられたものと見られる。

絵図によると堀の石垣は汐止の先端より20間北に入ったで汐止に突き当たるように記載してある(県博Na994図)。この部分に当ると思われるところに、大小の石が点在していた(第9図)。かなり崩壊はしているが、これらの石は比較的直線的に並ぶことや、絵図記載の堀の石垣にあたる部分と重なることから、この部分が築造当初の石垣であったのではないかと考えられる。

4. 土 壙

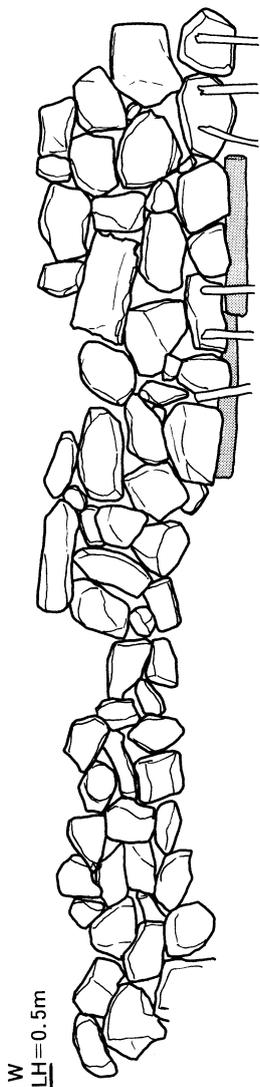
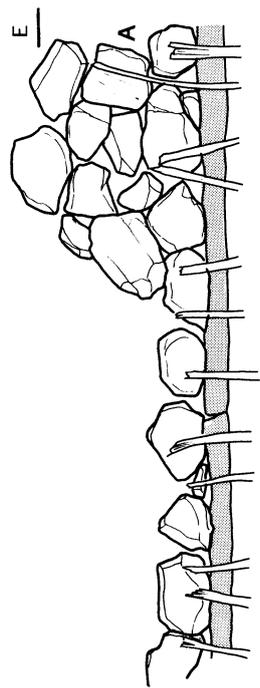
土 壙 (第15・16図)

SK-01は第1区で検出した。1.85×1.35mの隅丸三角形で、深さ30cm程度の浅いものである。上層より灯明皿など供献遺物を検出している。時期としては18世紀中頃から後半のものと考えられる。

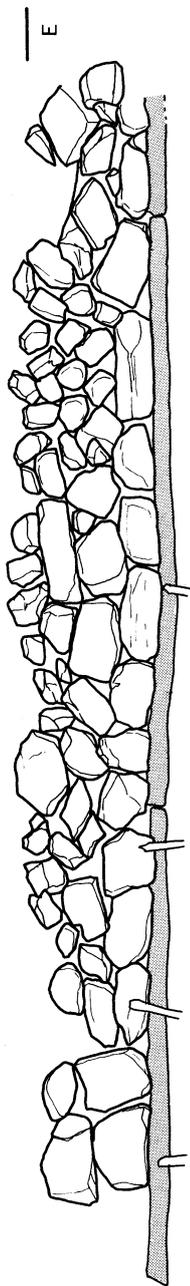
SK-02は第1区で検出した。径2.0mのほぼ円形で、深さ90cmである。中には70×50cm程度の大きめな石のほか、10cm程度の石も数個入っていたことから、井戸だった可能性もある。遺物は検出されなかったため時期は不明である。

SK-16は第2区西で検出した。3.1×2.0mの不整形な楕円形で、深さは42cmである。中からは30cm前後の石が多量に検出されたほか、遺物として備前・白磁・青磁・焼締陶器・宋銭・舟形木製品などを検出し、15世紀の後半から16世紀頃のものとする。

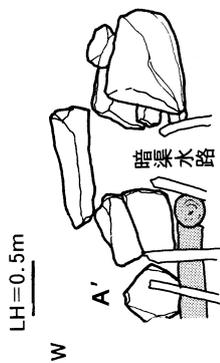
SK-17は第2区西で検出した。2.96×2.3mの隅丸三角形で、深さ30cmである。中からは備前・土師質土器・箸等を検出した。時期としては15世紀から16世紀と思われるが、SK-16



第3区石垣

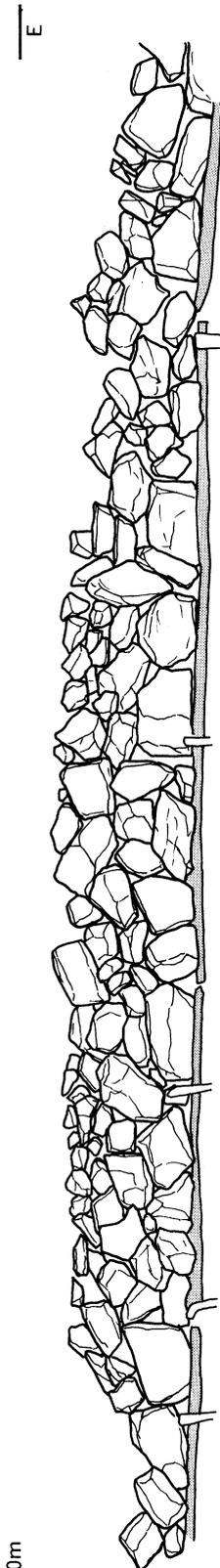


第3区石垣



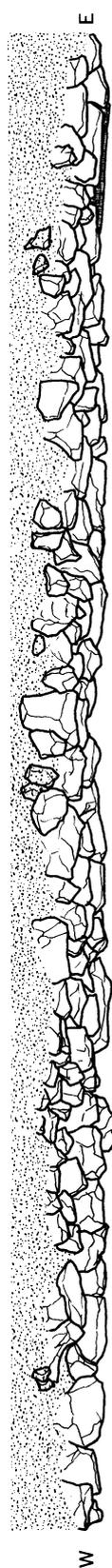
LH=0.5m

W

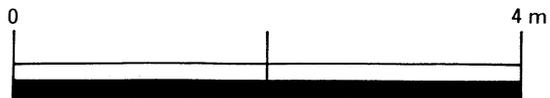


第4区石垣

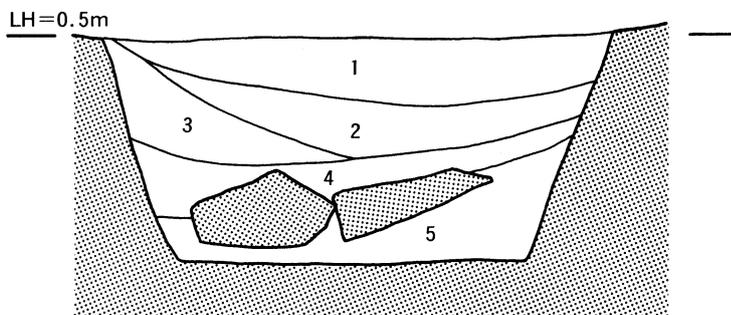
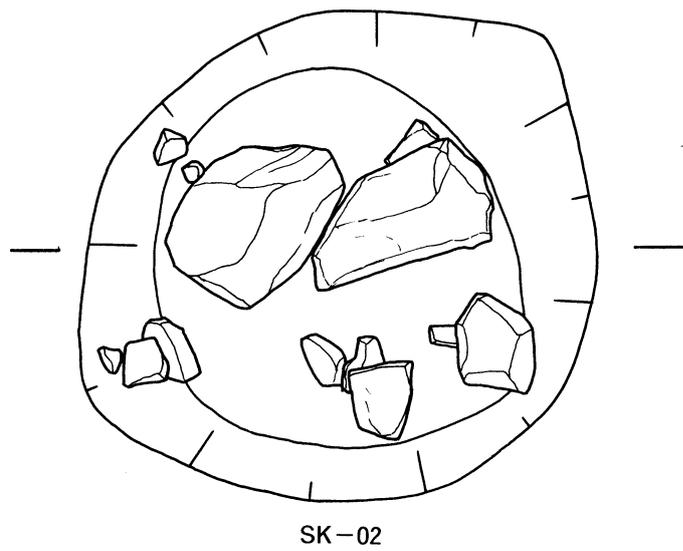
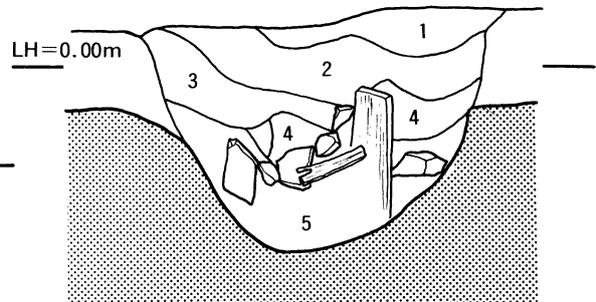
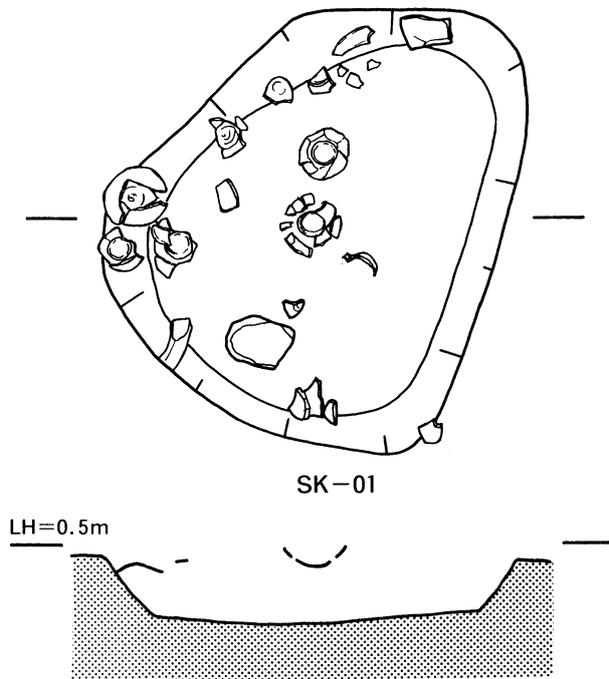
LH=1.0m
W



第4区石垣



第14图 第3·4区石垣

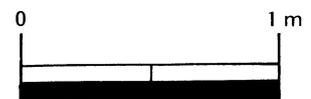


SK-23土層

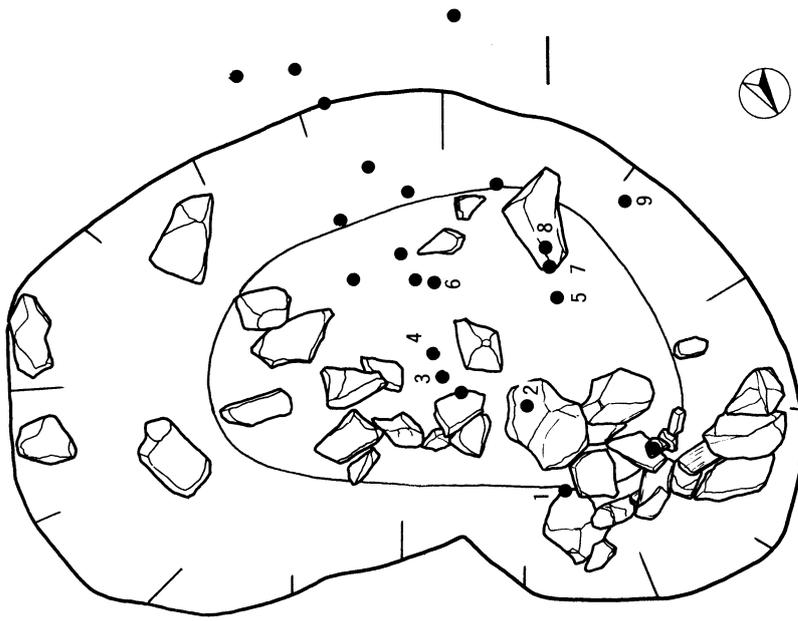
1. 黄茶褐色土 (黄色ブロック多量に含む)
2. 黒黄褐色砂質土
3. 淡黒色砂質土 (貝殻多量に含む)
4. 淡黒灰色砂質土 (貝殻少量含む)
5. 淡黒色砂質土
6. 淡黒黄褐色砂質土

SK-02

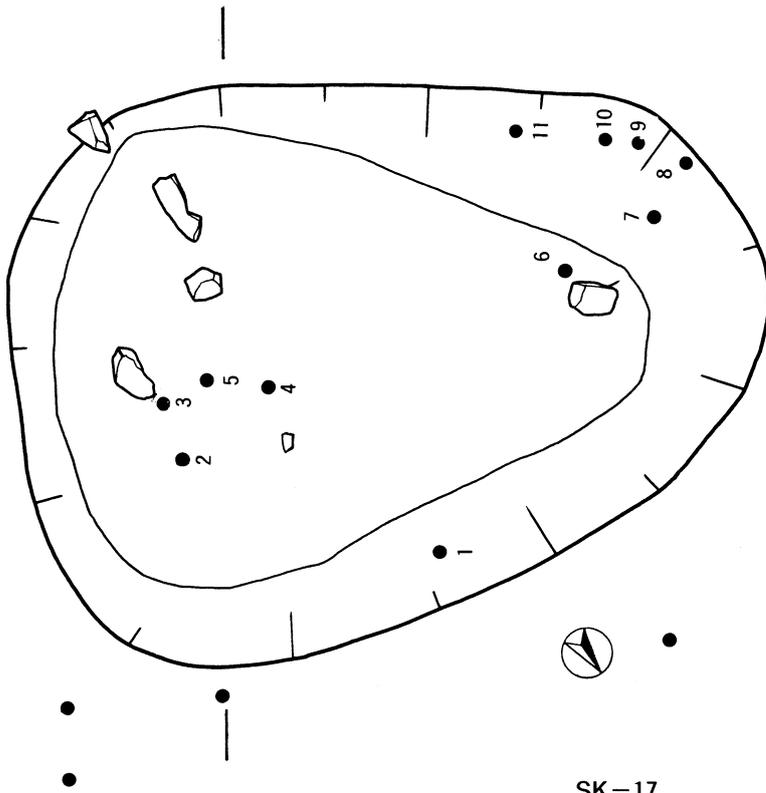
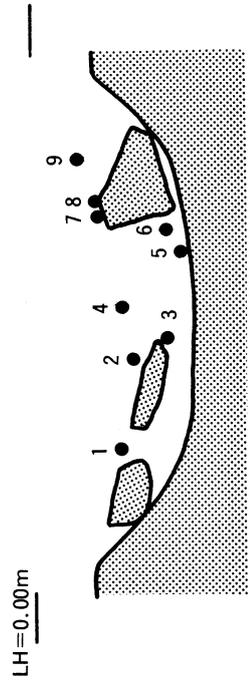
1. 黄褐色粘質土 (硬質)
2. 暗灰色砂質土 (黄・青色ブロック含む)
3. 暗灰色砂質土 (粘質)
4. 淡茶粘質土 (黒色砂含む)
5. 黒色砂質土 (腐食土含む)



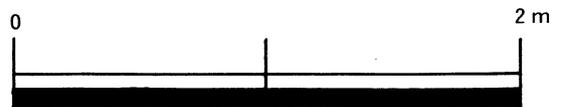
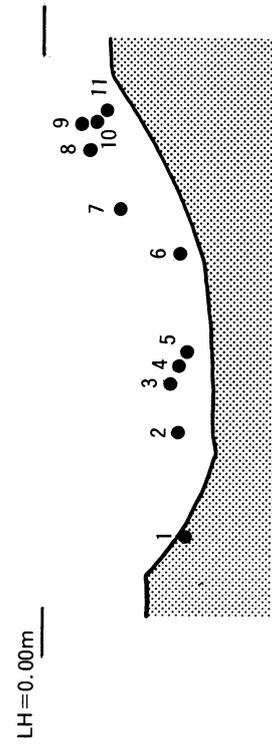
第15図 土層平面図



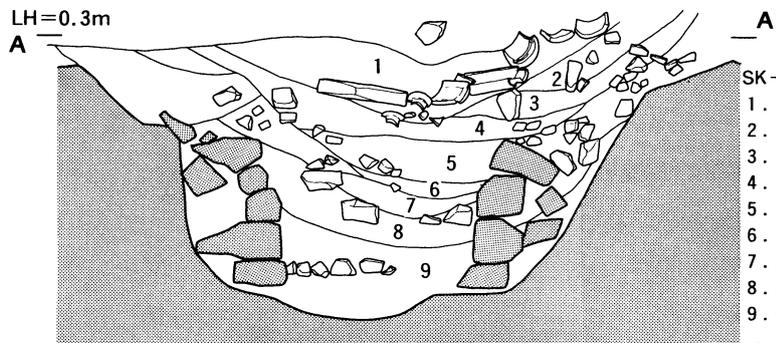
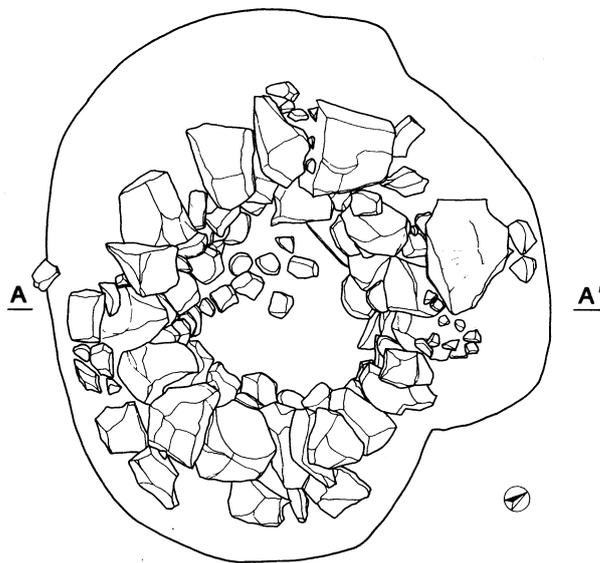
SK-16



SK-17



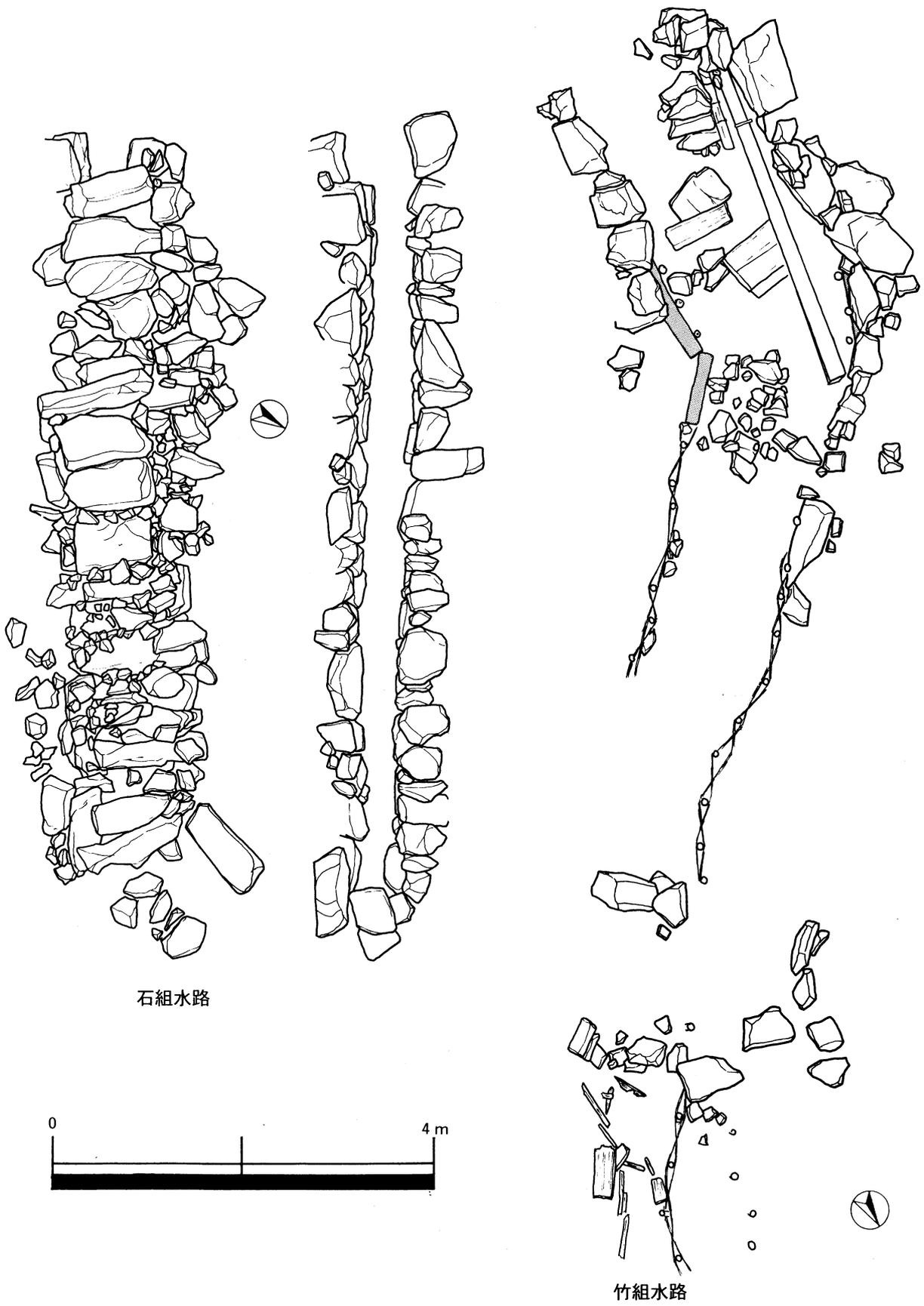
第16図 土壌平面図



- SK-18
1. 黒色シルト (砂質)
 2. 褐色砂質土
 3. 黒色粘質シルト
 4. 褐色砂質土・黒色シルト交互層
 5. 褐色砂質土 (黒色シルト層混)
 6. 黒色粘質シルト (貝殻含む)
 7. 黒灰色砂質シルト (石含む)
 8. 黒灰色砂質土
 9. 褐色細砂質土 (粗砂混)



第17図 SK-18平面図



第18図 水路平面図

よりは古いものである。SK-16・17は共に埋土に多量の貝殻を含む土壌である。

井戸 (第17図)

SK-18は第2区南で検出した。約2.0mの円形で深さ約75cmであった。中には4～5段の石積みの井戸が残り、底から備前播鉢 (No49) を検出したほか、中間で青磁・白磁・朝鮮陶器・北宋銭・備前・越前・瓦質摺鉢等を検出した。このことから15世紀末から16世紀前半のものとする。またこの井戸の上面では瓦が多量に検出され、これらは一度井戸が埋まった後、埋立時期に捨てられたものと思われる。褐釉陶器・古唐津なども検出されていることから、16世紀末から17世紀初頭に捨てられたものと考えられる。

SK-23は2区屋敷境界の石積みの下から検出した。径1.25mの円形で、深さ90cmの井戸である。底には井戸枠と思われる石が残っていた。SK-02同様中から後で放棄されたと思われる大小の石を検出し、青磁・白磁・備前等を検出していることから、15世紀から16世紀代のものと思われる。

5. 排水路

3区石組水路 (第18図) 全長8m、幅40cm、高さ60cmで石を2段に積上げ、石蓋をした暗渠水路である。堀の石垣に付随して堀へ流れ込むように造られていることから、明治以降のものであると考えられる。この水路には竹桶や箱型木桶の水路によって、その後も水を流していたようである。

3区竹組水路 (第18図) 現代建物によって一部しか検出出来なかったが、幅約1.2mの竹で組んだ水路である。水路の端が建築当時の石垣のあたりに繋がっていることから、近世には使用されていたと考えられる。一部二重に作られていることや、土層を見る限り、最低3回は造替えて使用していると見られ、石組暗渠に繋がっていることから、かなり長期に亘って使われていたようである。

第2区南 (第13図) 東部分で弧を描くように曲がる高さ1.2mの石垣の一部を検出した。埋没土層を見ると、水路だったのではないかとと思われる。地下埋設によって一部しか検出できず利用法は不明であるが、3区の竹組水路に繋がる。この石垣もまた一切記述はないが、石の積み方や、出土遺物などからも比較的新しい時期のものであると考えられる。

なお、石垣の断面を見ると石積みの下に杭を打ち竹で組んだ水路の痕跡があった。このことよりこの石積水路を造る以前にも水路があり、断定は出来ないが絵図に記載のあった馬場の水路であったのではないかとと思われる。

III 遺物

取上番号にして1300点、コンテナ45箱分を検出した。土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、瓦器・瓦質土器、瓦、鉄製品、木製品 (柱、舟形木製品、箸など)、柱根、古銭、獣骨などがある。若干が井戸、土壌、溝等の遺構に関連する以外は各堆積層、整地層の出土である。

古墳時代～奈良時代の遺物 (第19図-1～11、第23図-124、図版5)

古式土師器、土師器、須恵器、埴輪など。-1m～0.6m内外の砂層より出土。古墳時代

中期遺物も若干見られるが古墳時代前期、奈良時代後半期に集中する。古式土師器は甕、大型壺形土器。須恵器は回転糸切底が大半を占める。車輪叩きを持つ甕片も見られる。

土師質土器（第19図-17~37、第20図-40、図版5）

埋立て前後の黒色砂層からの出土が多い。10世紀から16世紀代にわたるものである。

17、18はロクロ回転成形の椀形土器で底部回転糸切り、灰白色を呈し硬質。2区東、2区西の黒砂層出土。2区SK-08、3区SK-11、Pit118からも出土した。20は回転糸切り高台、21は貼付高台、皿19は底部回転糸切り。22はSK-17出土の丸底の椀形土器、やや瓦質的で口縁部を指ナデ、胴底部手捏ねで仕上げる。

23~26は静止糸切りの坏皿類。23、26には煤の付着が見られる。27~37は手捏ねの皿。36、37には指抜きが見られる。27~29は1区標高50cm台、30~32は1区標高80~90cm台、34~37は1区標高70cm台。35~37はSD-01内、33はPit14内。

40は煤が付着しており土鍋底部と思われる。

瓦器、焼締陶器類（第20図-38、39、41~60、第23図-125、図版6）

瓦質土釜（38） 1区黒色砂層標高36cm出土、煤の付着著しい。

瓦質摺鉢（39） 灰~黒灰色を呈し、やや軟質。SK-18出土。

焼締陶器（41、42） 胴部外面に細かな格子目叩きを持つ。41はSK-18出土、黄褐色を呈す。42はSK-16出土、黒~黒褐色を呈す。

土師質器摺鉢（43） 口縁端部が角張り乳白灰色を呈しやや軟質。3区砂層出土。

越前摺鉢（44） 丸味を帯びた口唇部を持ち口縁内側に凹線文を巡らす。乳白色~薄茶色を呈し、やや軟質。SK-18出土

備前摺鉢、壺、甕、水指（45~60、135） 1区を中心に約50点を検出。埋立て直前から1次埋立てまでの層に集中する。備前編年のIV A（古）期からV期の範疇に属する。45は1区黒色砂層標高26cm出土、46は1区黒色砂層上面標高69cm出土、51、55は1区青灰粘質ブロック混じり黒灰褐色砂質土層（1次埋立）上面標高87cm出土。49はSK-18・井戸底、52、57、58はSK-18内出土。135はSK-09の大型埋甕、56と同一固体。

輸入陶磁器（第21図-61~80、口絵2、図版7）

竜泉窯系青磁、白磁、朝鮮陶器、染付、褐釉陶器などがある。いずれも埋立前土層や土壌、溝からの出土。13世紀~17世紀初頭。

青磁（61~70） 蓮弁文碗11、菊花皿1、稜花皿1点。14世紀末~15世紀代に主流を置くものである。61~63は鎬蓮弁文碗。64は玉縁口縁、内面に刻花文、SK-18・井戸石組裏込め出土。65はSK-23出土の端反碗。端反碗は1区からも1点出土。69、70は菊花皿、薄緑色の釉薬がかかる。66~68は肉厚の削出し高台。66は内面刻花、67、68は圈線、印花文。

白磁（71~73） 碗皿類4点。71は端反り碗、全面乳白色釉。72は削出し高台で1区の青磁より下の砂層より出土した。14世紀代と思われる。

染付（78~80） 碗皿類8点。78はSD-01、79は1区黒青灰色砂質土出土。80はやや乳白灰色呈し胎土も磁器化していない。2区南Pit25内出土。以外に碁笥底皿2点。

褐釉陶器（74） 小型の褐釉四耳壺。SK-18出土。

朝鮮陶器（75~77） 1区より3点。75は薄手の腰折れ皿。灰青釉を全面施釉。76、77は船徳利形の瓶で緻密で粘り気のある暗灰色の胎土を持つ。76はSK-18出土。内外面明褐色釉。

77は外面に薄褐緑色の泥釉を施し、内面には円形叩き目が残る。

国産陶器（第21図-81~95、図版7）

唐津系50点以上、瀬戸美濃系10、その他（楽焼系1、近江系？1）を検出した。

唐津系（81~90） SD-01内及びその周辺からの出土が目立つ。碗5、絵唐津皿1（81）、皿約30（83-胎土目、以外は砂目積）、その他緑釉刷毛目壺・鉢、こね鉢、摺鉢等。碗89は銅緑釉、90は二次焼成を受け薄紫色。黒釉碗2もある。

瀬戸美濃系（92~95） 埋立て前及び直後の地層から出土した。大窯Ⅲ期に当たる。92は黒褐釉、93~94は透明釉の腰折れ皿。いずれも胎土モグサ土。天目碗は5点。いずれも鉄泥をぬり、褐色~黒褐色を呈す。95は1区南側の五輪（火輪）近くの出土。

その他 91は楽焼系と思われる銅を使用した緑釉陶器。黄褐色埋立土層内出土。近江系と思われる平底の小壺形軟質緑釉陶器もある。

瓦（第23図-126~131、図版8）

SK-18一括品の外、各区で検出した。埋立て以前層と2区水路石垣裏込めに多く見られた。丸瓦が大半を占め、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、塀瓦等がある。2区南石囲、3区水路の裏込めには新旧瓦が混在する。2区掘割り状石垣には若干の棧瓦も含まれる。127、128は18世紀頃の埋立て整地層。SK-18瓦と1区、3区例の成形技法には共通のものが見られる。

古 銭

8枚検出。北宋銭が目立つ。開元通宝（SK-18・唐）、皇宋通宝（北宋）、至和元宝（SK-16・北宋）、治平通宝（北宋）、元豊通宝（北宋）、聖（皇）宋元宝（聖-北宋、皇-南宋）、永楽通宝（明）、寛永通宝（江戸）。

SK-01関係遺物（第22図-96~104 4、図版8）

伊万里皿2、碗1、染付皿1、灯明皿6、受皿付灯明皿2がある。18世紀前~中葉期と思われる。96は蛇ノ目高台、内面繊細な牡丹唐草・松竹梅、外面唐草文。97は肉太の唐草文。99は見込みに人形「寿」字を描く碁笥底の染付皿。くすんだ黄白色を呈し胎土も磁器化していない。混入の可能性もある。灯明皿は口径10cm、高さ2cmと、口径9cm、高さ1.5~2cm大の大小2種がある。底部には細かな回転糸切痕を持つ。明褐色を呈し硬質で薄手。104は灯明皿を受皿として小杯状の注口付き油溜りを付けたもので作りは灯明皿と同じである。内部底に蠟状の付着物が残る。同形式の土器は2区南から2点出土している。

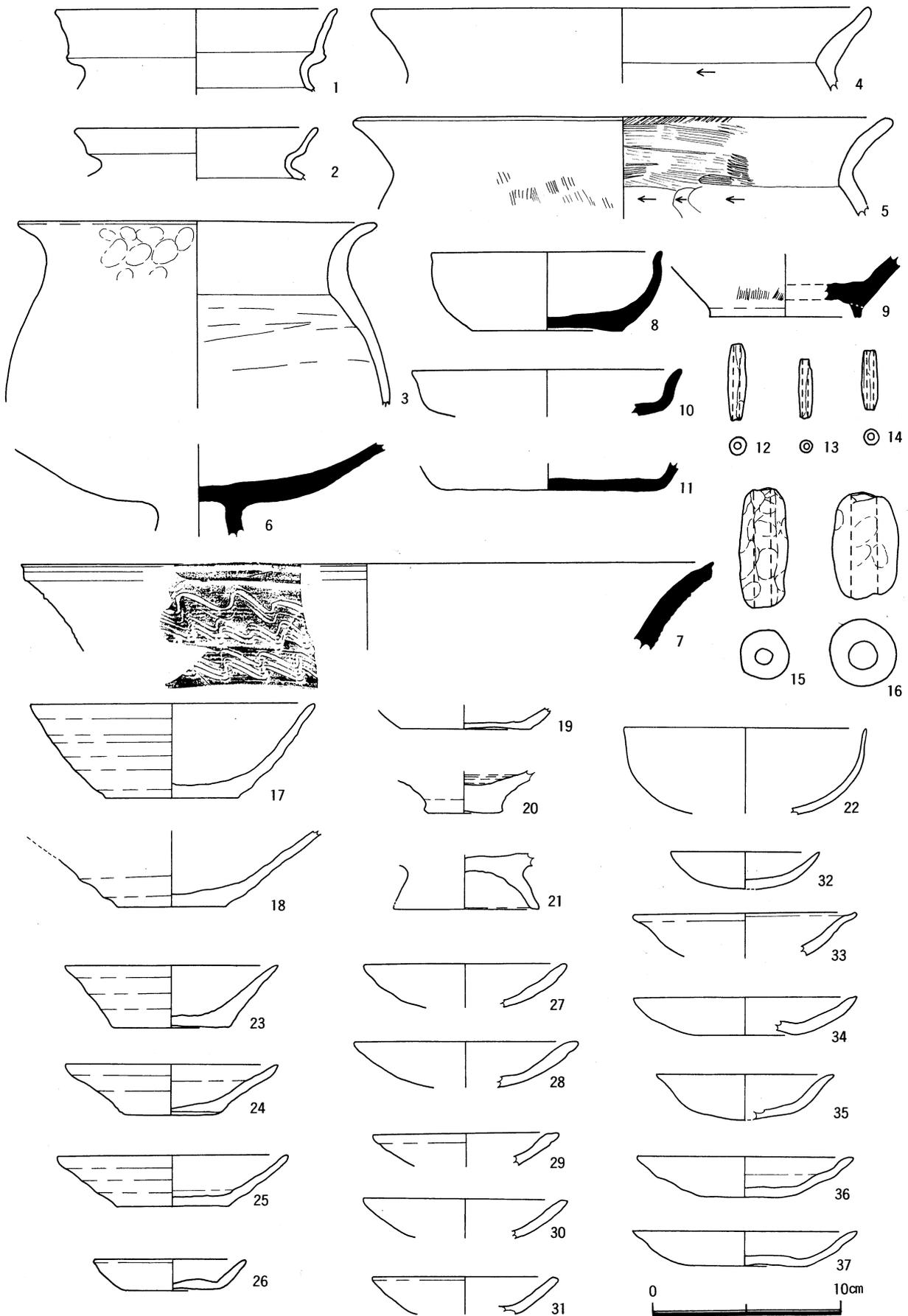
江戸期の遺物（第22図-106~122、図版8）

1区東南部の低地（池？）と2区北東部の遺物溜りに多く、石垣裏込、3区竹組水路内からも出土があった。伊万里碗皿類、唐津系摺鉢の外、在地系陶磁器もある。18世紀~19世紀前半を主体とするものである。109は赤絵染付碗、焼継痕が残る。116は島根県・意東焼。121はくすんだ乳白色を呈す赤絵中鉢、窓囲をし牡丹花・唐草を描く。古式で輸入品の可能性が高い。122は粉引きの水指蓋、つまみに狛犬風の獣形をあしらう。

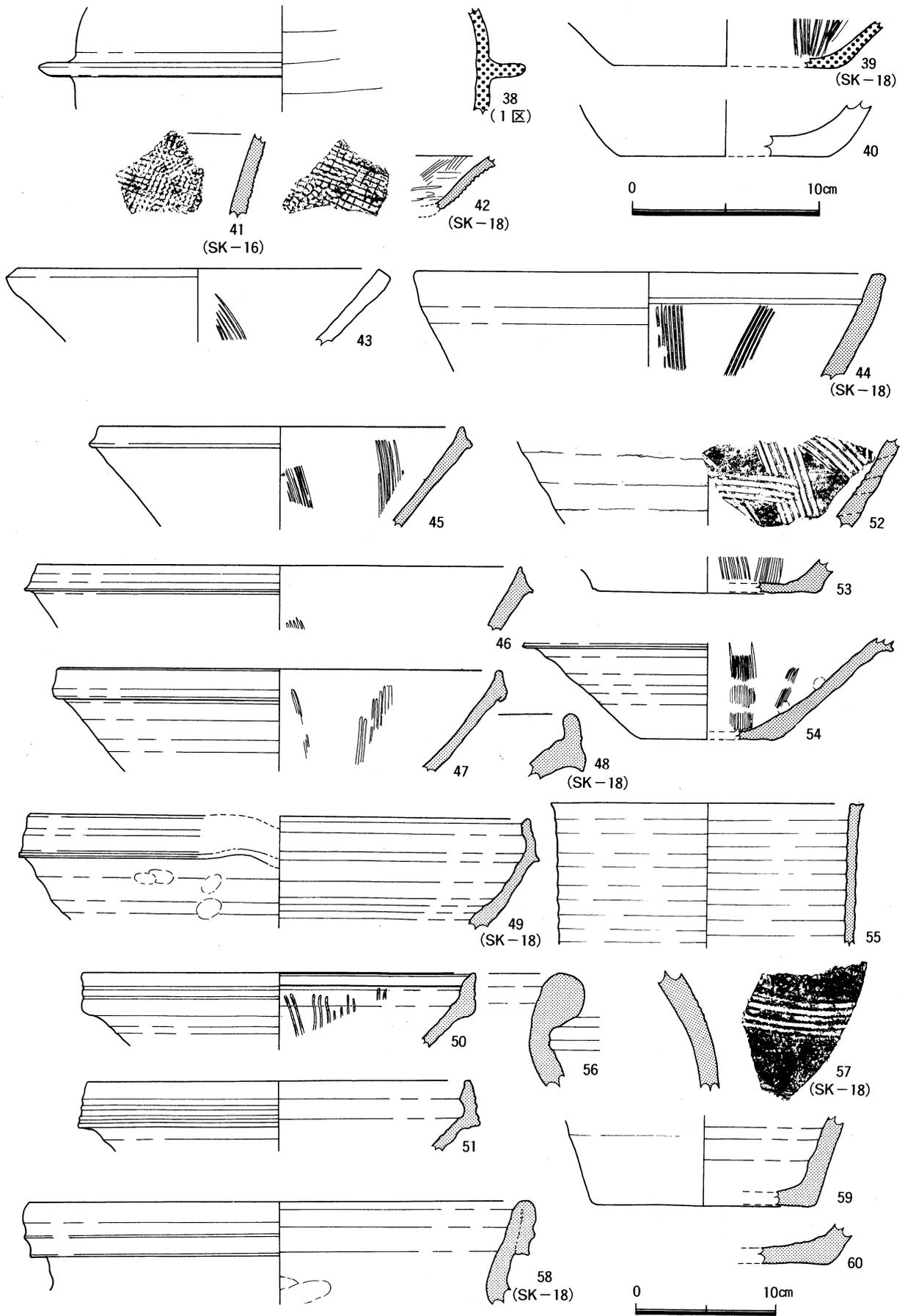
明治期の遺物（第22図-123、図版8）

3区内堀廃棄層、埋立整地層及び竹組水路内からの出土が多い。伊万里、京焼系、布志名焼、母里焼、楽山焼、石見系等各種がある。伊万里では型紙摺印判手が見られる。123は『出雲国能義郡神楽崎』『英造』銘を持つ。明治10~13年に焼かれた島根県母里焼の把手紐付広鉢である。『神楽崎』島根県母里焼神楽崎窯。明治10年開窯。

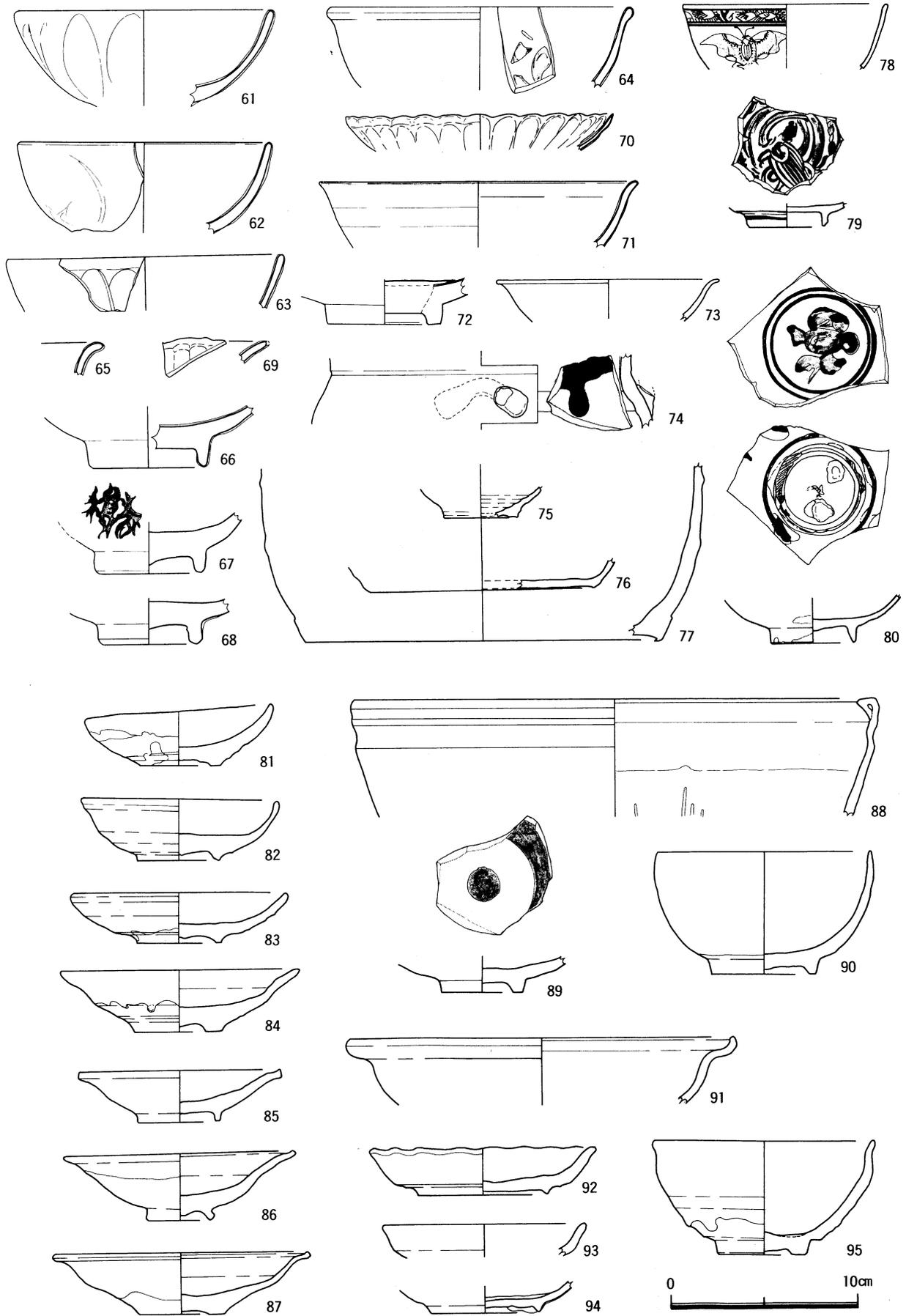
『英造』は島根県布志名焼の陶工名。開窯に当たり3年間作陶指導をした。



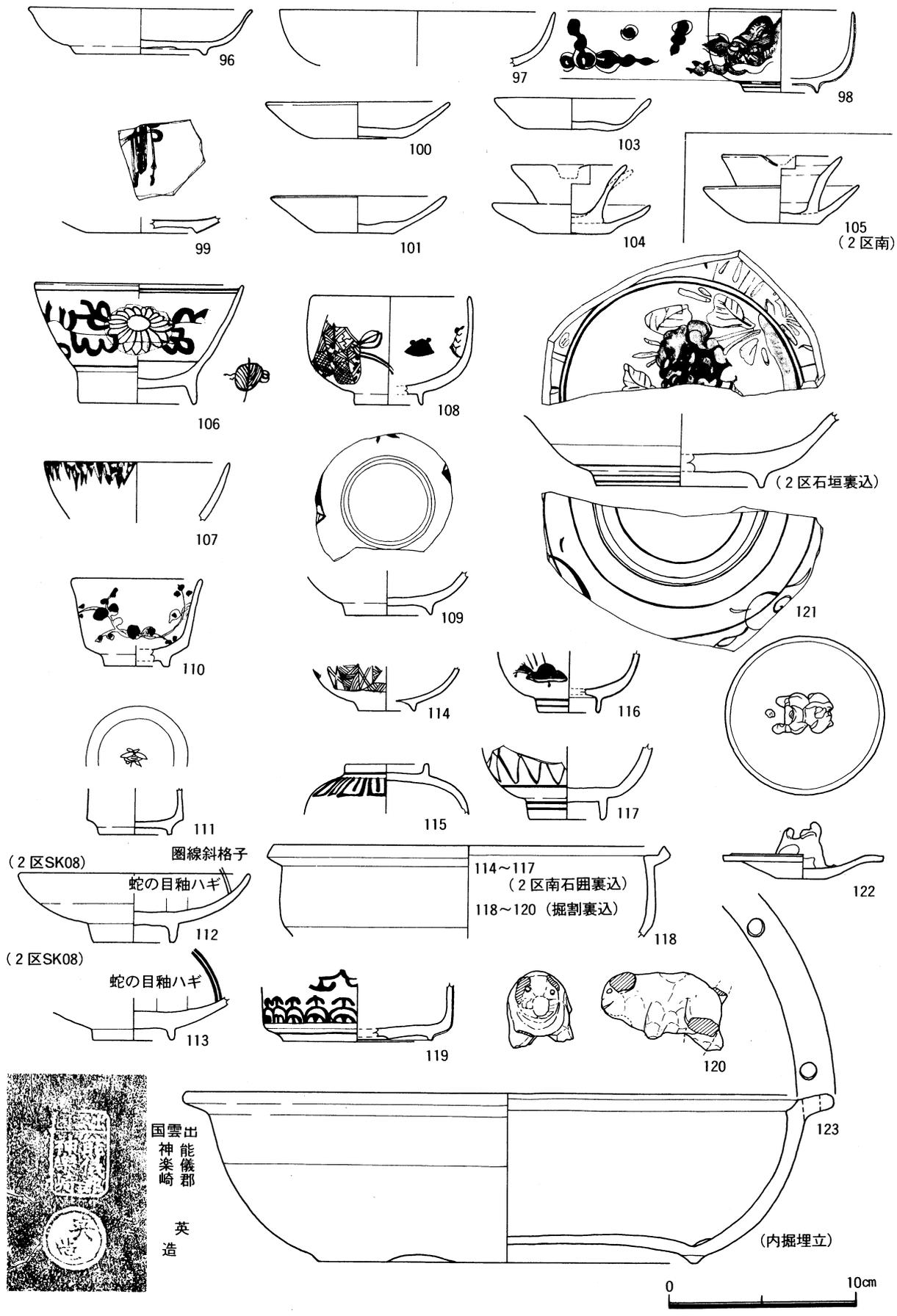
第19図 土師器、須恵器等



第20図 瓦質土器、越前、備前等

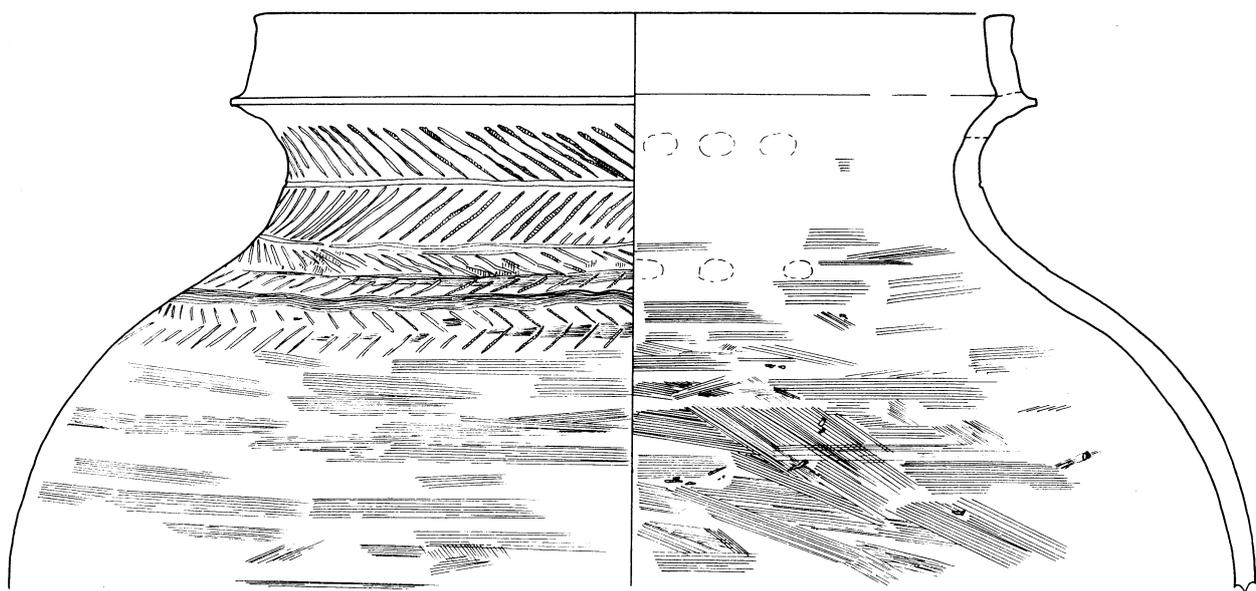


第21図 陶磁器類 (青磁、白磁、染付、瀬戸美濃、唐津等)

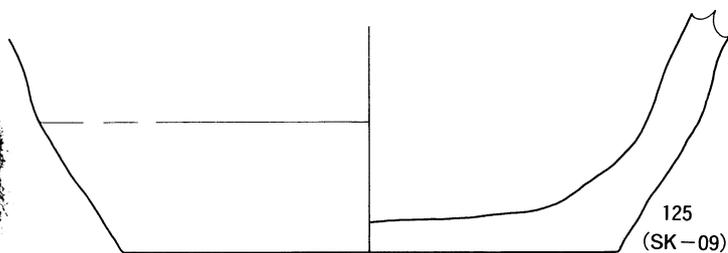


出雲能備郡
神楽崎
英造

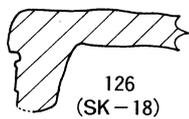
第22図 近世・近代遺物



124
(2区西)



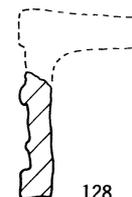
125
(SK-09)



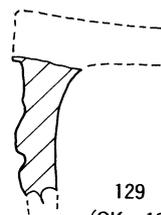
126
(SK-18)



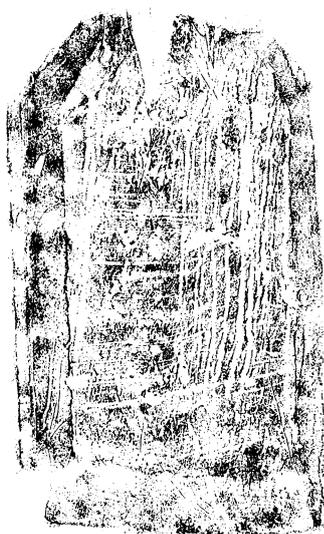
127
(1区近世)



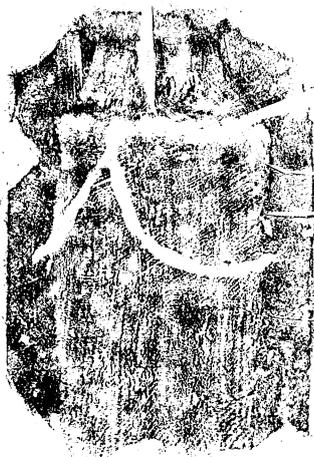
128
(1区)



129
(SK-18)



130
(SK-18)



131
(SK-18)



第23図 古式土師器、備前大甕 瓦

IV まとめ

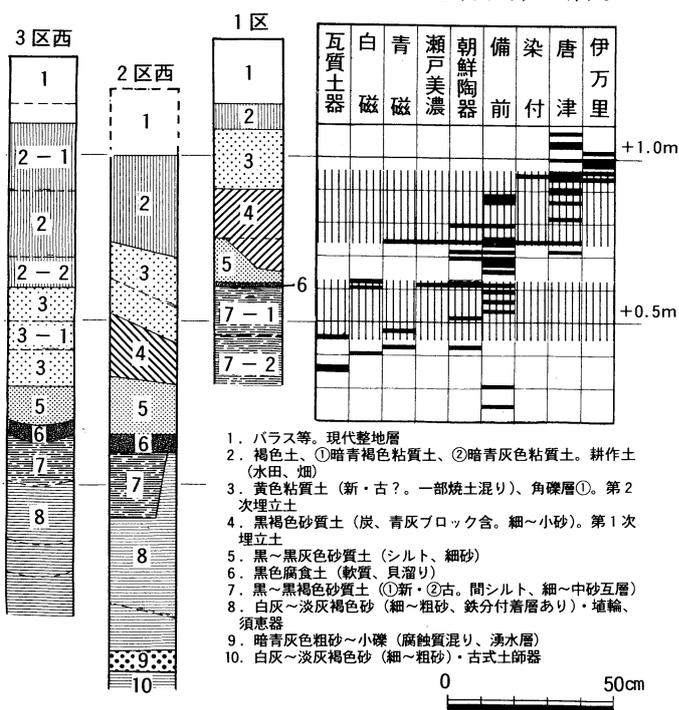
今回検出した遺構は、近世米子城・城下町の内堀跡、馬場跡、武家屋敷跡とこれに前後する中世及び近現代遺構である。近世の城郭形成は、治世の為のマチづくりであり、その縄張りは都市計画の理念と思想を具体化したものである。地域や経済の制約の中で執られた各種の施策は形は異なれ今日にも連なるものと思われる。築城以来四百年、米子城跡は今日の米子市発展の過程を具体的に示すと同時に未完の課題も含み伝えているように思われる。今回この形成と変遷の一端を見たが、これを機会に今後更に、より一層の検討が進められることを期待するものである。

層位と地形 調査は深部で現地地表下約4m、全体的には1～2mを掘下げた。地区により土質や高低に多少の差異起伏はあるものの、一定のまとまりが見られる(第24図)。

第1層が現代整地面、第2層が近世～現代の耕作層、第3、4層が埋立整地層、第5層以下が自然堆積層である。

第3層は掘下げの過程で伊万里が消え唐津のみになる地点があり、前後二次に亘るものと思われる。第7層も場所により深浅があり、細分される可能性がある。第6層は黒砂層を第5層、7層に二分する腐蝕土層であり、1区南東側に池状低位地形、西側に南北に延びる溝状地形、1区西端から2区東、2区西にかけて幅約10mの西方に向かってのびる低湿地形を検出した。貝溜りはこの低湿地形に沿って分布する。

8層以下は流砂堆積層で、鉄分沈着層や若干の有機質層はあるものの安定した生活層はうかがえない。9層を挟んで、10層以下が古墳時代前期、8層が古墳時代後期に該当する。この時期における砂の盛んな堆積現象は久米第1遺跡(1988・米子市教育委員会)でも確認されている。



第24図 土層と遺物垂直分布

遺物と生活層 一区の遺物出土状態を見ると、標高0.95m、0.75m、0.6m、0.45mの辺りに集中層があり、それぞれ第4層上面、5層上面、6層～7層上面、7層に相当し、第7層以降数次の安定生活面を指摘できる(第24図)。

時期的には概ね、7-②層が回転糸切底須恵器、回転糸切底土師器、瓦質摺鉢等を主体とし、8世紀後半～15世紀前半代。8～9、10～13、14～15世紀代に細分される。7-①層が備前(IV A古)、青磁、白磁を主体とし、15世紀後半～16世紀前葉。5層が備前、瀬戸美濃、青磁、染付、朝鮮陶器等を主体とし、16世紀中葉～後葉。備前(V)、古唐津出現まで。4層が16世紀末～17世紀初頭。3層古が唐津を主体とし、17世紀初頭～前半期。3層新が伊万里出現以降、17世紀後半～18世紀後葉。2層が18世紀後半～19世紀前半期と思われる。

これらは米子城とその周辺整備の過程を示すものである。8世紀後半以降、地盤の安定化と共に徐々にこの地域への進出が図られ、15世紀後半から16世紀代に積極的な整備がなされ、16世紀末～17世紀初頭に、米子城築城に伴う大規模な埋立造成が行われている。

中世の米子の町並形成は、「陰徳太平記」元亀2年（1571）の記事に見える米子の町焼討ち、島津家「家久君上京日記」天正3年（1576）の「よなこといへる町に着き」などから、少なくとも毛利氏が進行した1560年代には一定規模の整備がなされていたとされるが、その場所は飯山砦の築造以降の飯山・湊山を中心としたこの地域であったと考えられる。

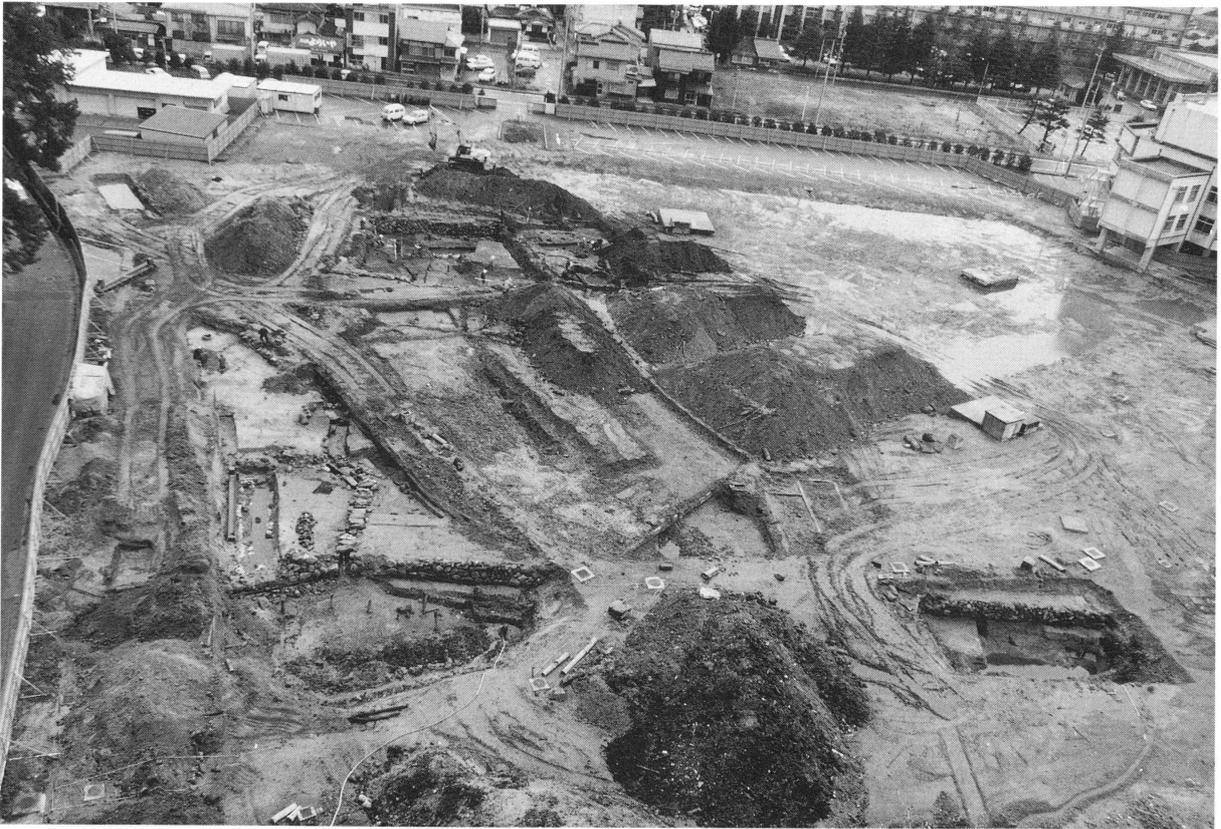
遺跡の特徴 今回調査の内容は隣接の久米第1遺跡に類似しており、基本的には同一の遺跡の二者と見ることができる。しかし、久米では埋立ては15世紀後半には既に始められ、数次を経て16世紀後葉期には完了する。近世にはほとんど利用がなされず、唐津、伊万里などの近世遺物がまったくない。これに対し、今回は、埋立ては近世城郭形成に伴って始められ、遺物にも線描蓮弁文青磁碗、端反青花皿の組合せが見られない、などの差異がある。城郭中核部と周辺部における位置付けと整備の段階の違いとしてとらえることができる。

絵図と遺構 近世米子城は天正～慶長年間に一応の完成を見たとされるが、荒尾氏預り以降の寛文年間を上限とする現存の米子城関係絵図においてもその後かなりの改変があったことがうかがえる。主な変化は、A、裏門から西の波戸にかけての内郭北西部の輪郭線の変化。B、外郭の南西部－内堀外側部の汐止・馬場・道路の消長・改変。C、外郭の家臣団居住区域における異動・存廃、である。その大半は城の北西部の内・外郭部に集中し、17世紀後半と18世紀後半代が多い。位置、時期共に今回調査の成果と極めて近く、興味深い。

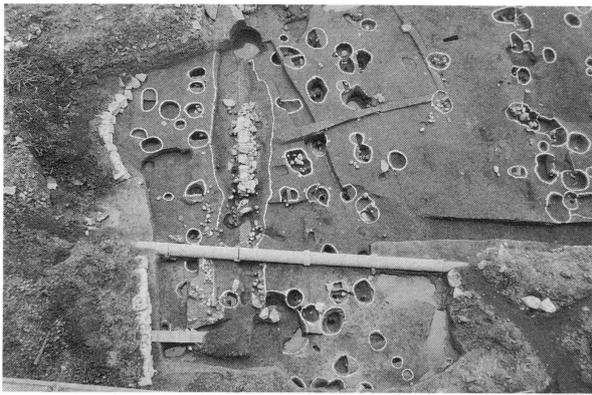
Aについては、17世紀中頃と見られる「伯州米子御城絵図」（①米子市立図書館蔵）等では裏門からの内堀ラインが波戸部で鍵形に三重に屈曲するのに対して、宝永6年（1709）の「伯耆之國米子平図」（②県博蔵、整理番号993）、享保5年（1720）の「湊山金城米子新府」図（③県博蔵、整理番号999）では裏門部の塀壘が二重になり、波戸部に奥行き12間、幅29間のコの字状船溜りが整備される。

Bについては、①では内堀に沿って武家屋敷との間に道が描かれるのみである。幅14間とありかなりの広さはあるが馬場はない。馬場は②、③で始めて描かれる。武家屋敷の輪郭は変わらないものの、北側の道武家屋敷との間に直接海水に通ずる形の水路が設けられ、海側に汐止の記載はない。明和～天明期（1764～1794）の「米子御城下図」（④県博蔵、整理番号994）、近世中期以降とされる「伯州米子之図」（⑤県博蔵、整理番号997）では水路は姿を消し馬場の周りには囲いが設けられる。汐止は再び描かれ、内堀りと海に向かって突堤が突出る。④、⑤以降の形状はA、B共に、明治3年（1869）の「米子町全図」（⑥米子市立図書館蔵）でもほとんど変わらない。Cについては詳しくは触れないが異動・変化の波は同様であるように見える。

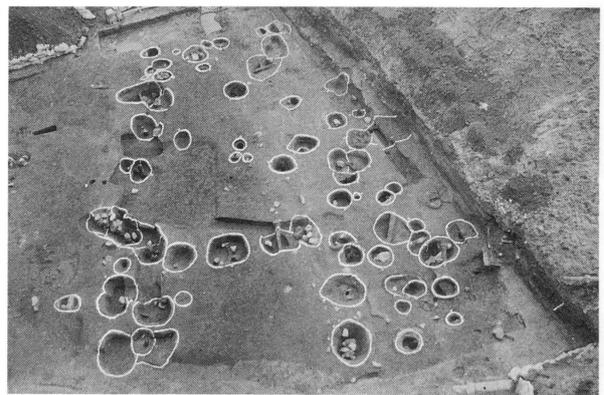
これらの背景については今後の課題としたいが、同時期の動きとして、前者では承応元年（1652）の荒尾成利問責隠居、寛文7年（1667）の西北部外曲輪修理、後者では宝暦11年（1763）の米子城修葺米積立法制定、この頃の郭内湿地・空地の圃場等がある。18世紀後半～19世紀前半と推定している2区掘割り（水路）の築造もこれらに連動したものと考える。



調査地全景



1区 屋敷境界およびピット群



1区 ピット群



1区 屋敷境界（東側より）



作業風景

図版 2



2区水路全景



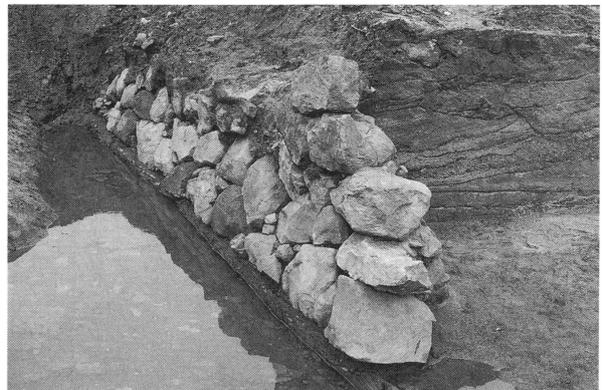
2区石 段



水路石垣(西側)



水路石垣西側断面



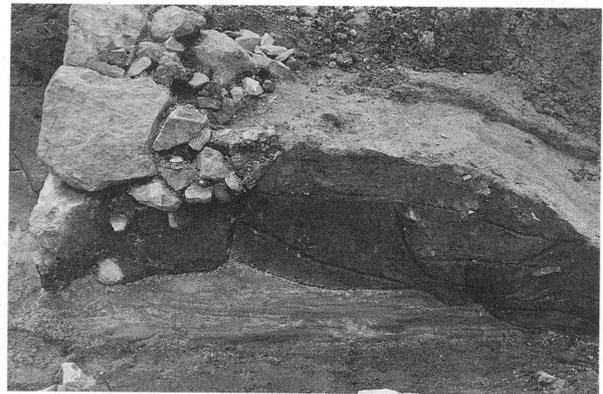
水路石垣(東側)



2区 屋敷境界 (西側より)



2区 屋敷境界 (正面)



2区 屋敷境界断面



SK-23 (井戸)



SK-18 瓦 留 り

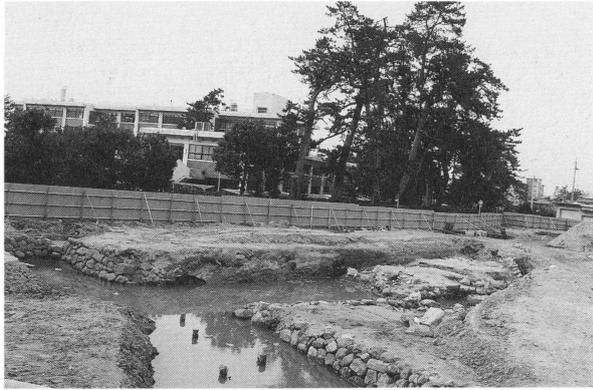


2区 南 水 路



SK-18 (井戸)

図版 4



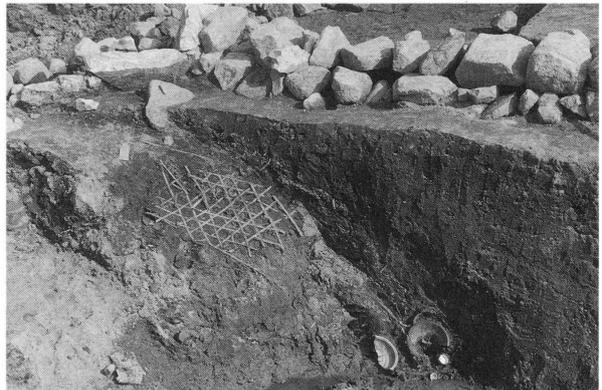
3区 全 景



内堀石垣(建築当初)



内堀底検出状況



内堀排棄埋立状況



3区ピット群



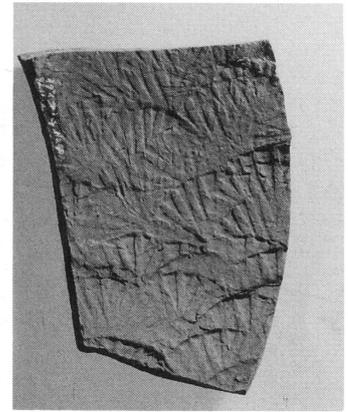
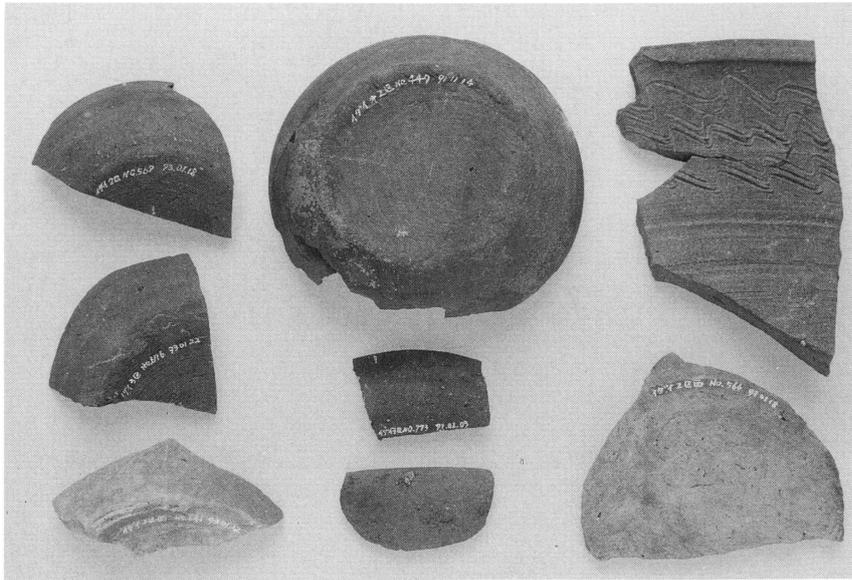
内堀石垣(改築)



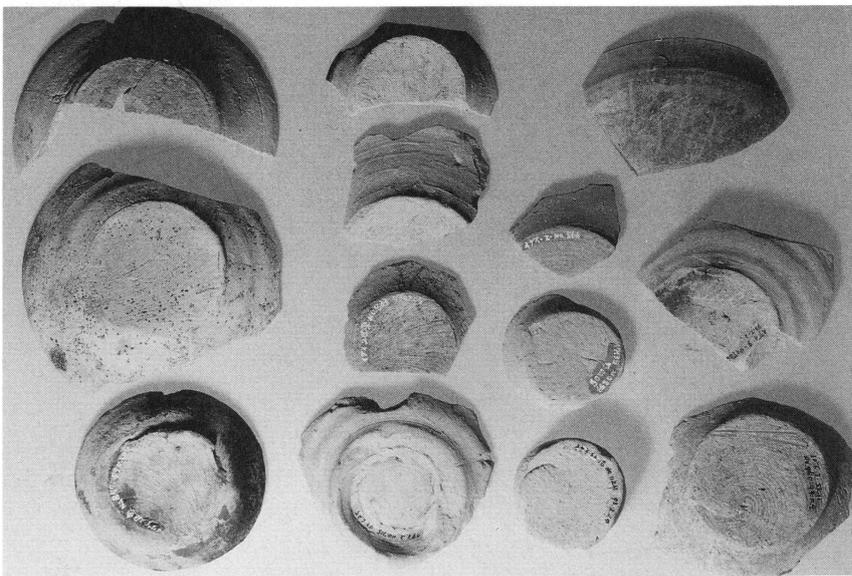
石組水路



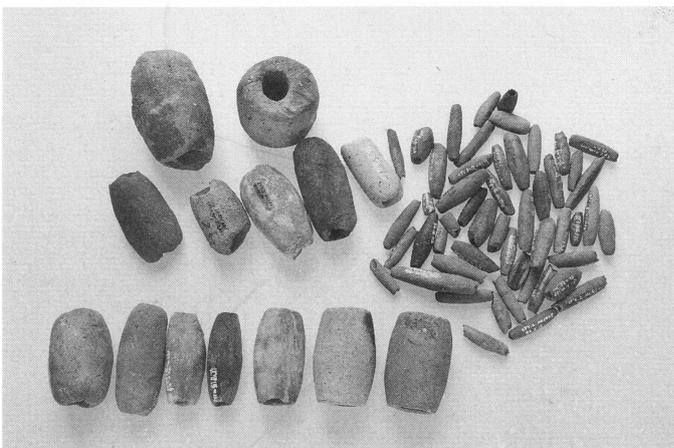
竹組水路



須恵器



土師質土器



土錘

(各区)

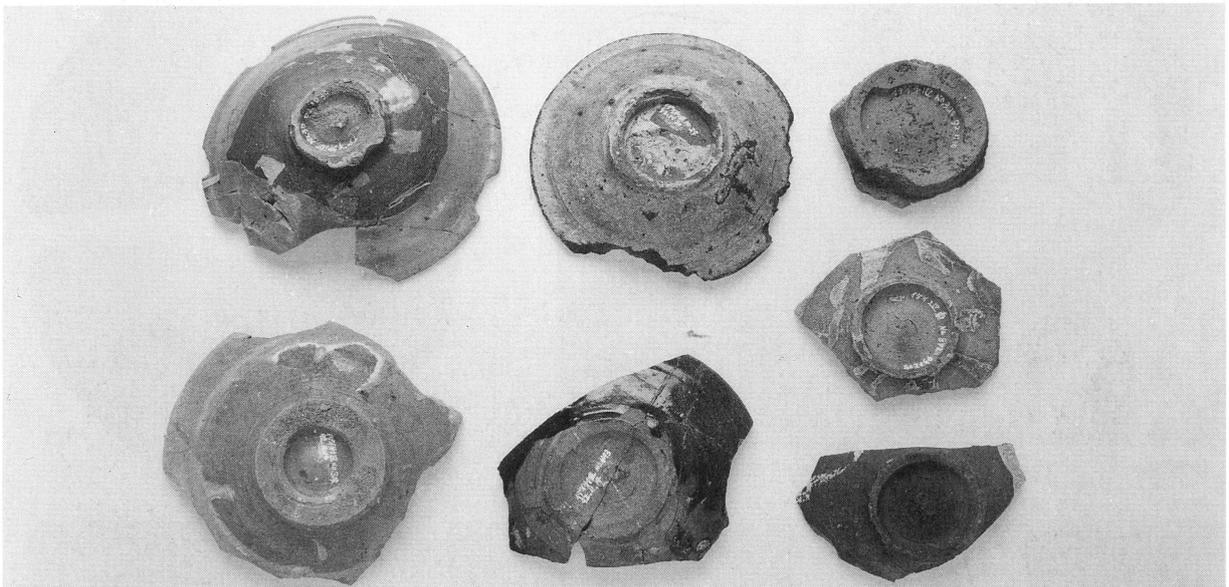
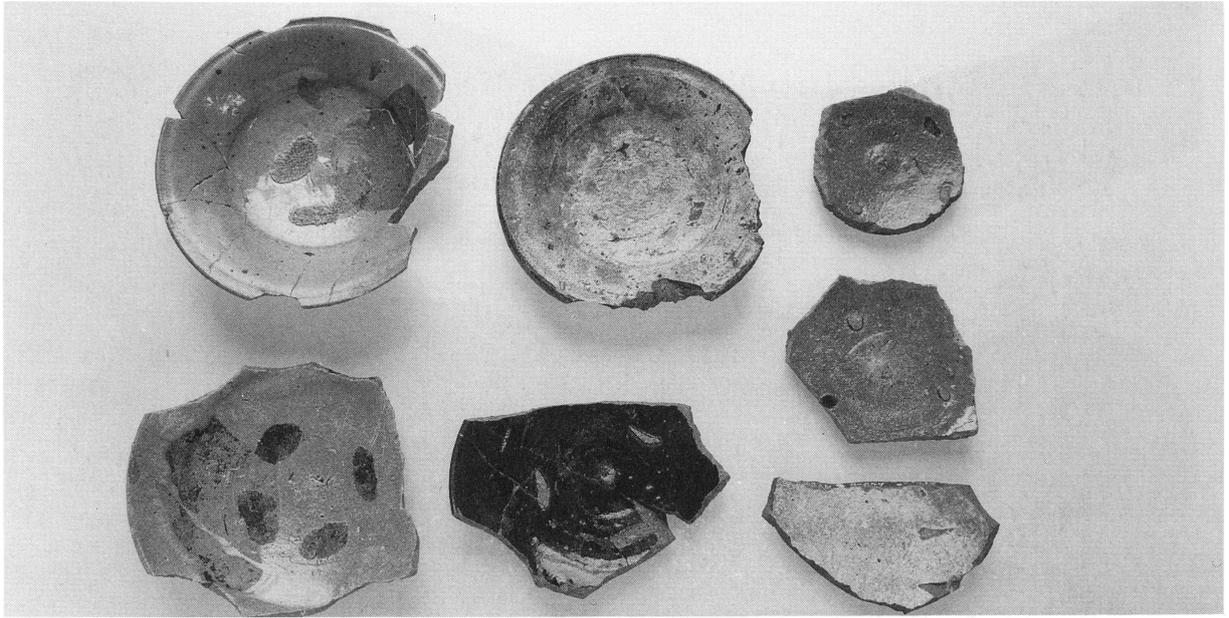


鉄鎌

3区砂層



備前摺鉢・甕・水指、越前摺鉢、土師質摺鉢



唐津

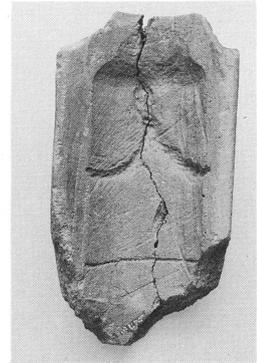


朝鮮陶器

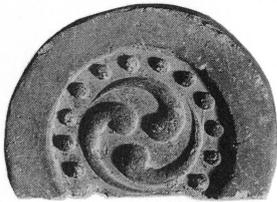
図版 8



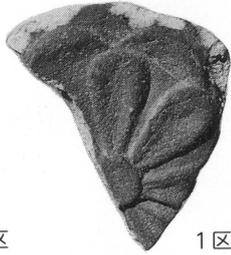
SK-18



SK-18



1区



1区



SK-18

瓦



伊万里

SK-01

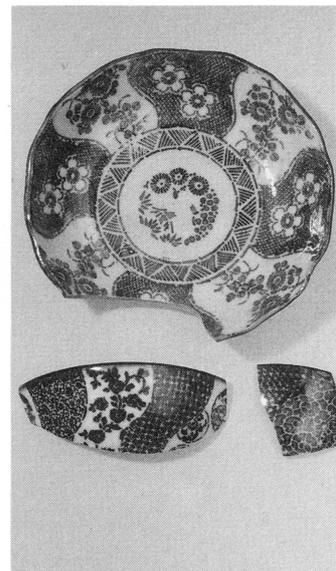


赤絵

121



伊万里



明治印判手

お詫びと訂正

米子城跡 I

頁	行	誤	正
口 絵		瀬戸美濃・近江系	瀬戸美濃・近江系・楽焼系
6	第3図	(説明補足)	地籍図・大正4年
7~8	第4図	(最下上層図)	第3区西上層図
23	21行	長期に渡って	長期に亘って
25	30行	北東部に遺物溜まりに	北東部の遺物溜まりに
	37行	母里焼、石見系等	母里焼、楽山焼、石見系等
	38行	(「神楽崎」説明)	島根県母里焼神楽崎窯。明治10年開窯。「英造」は島根県布志名焼の陶工名。開窯に当たり3年間作陶指導をした。
32	9行	始められた数次を	始められ、数次を
	15行	その後もなりの改変	その後もかなりの改変
	25行	のみである幅14間と	のみである。幅14間と
図版3		sk 23	sk-23 (井戸)
		sk 18	sk 18瓦溜り
		sk 18	sk 18 (井戸)